

はならない。

併しながら、支那との提携は單なる提携ではなくて何處までも寄與を主とする指導的協力ではなくてはならない。而も指導的協力には消極的と積極的との二面がある。前者は、東洋文化随つて支那文化の本質的發展を阻礙するものを防止匡救することであり、後者は、これを助長することである。そして、支那をして英蘇兩國の悪影響や歐米心醉主義から脱却させたり、排日抗日教育を匡救せせたりすることは前者の代表的なものであり、支那人と協力して支那を東洋人の目で研究し直し、且其の真相眞價を十分に發揮させるやうにしたり、學校を始め各種の文教機關を新設したり、學者や教育者を派遣して直接指導の任に當らしめたり、支那からの留學生に有效適切な指導を與へたり、日支合辦の文化的會合を開いたり、西洋文化の活用法を指導したりすることは、後者の主要なものである。

但し、この中で案外に困難なのは、前者殊に英蘇兩國の悪影響の脱却と排日教育の匡救とである。一方、蘇國とは國境を接してゐるばかりでなく、本來戦後殊に戦敗國に於ては唯物主義や共產主義を隆盛ならしめる可能性が増大するものであり、そして、支那の思想は本來デモクラティックで蘇國又は英米の思想と共鳴するものがあり、他方、十年間に亘る排日教育の影響は根強いからである。

随つて、何處までもしつかりと腰を落ちつけ、堅忍持久的態度を以てこれに當ることが必要である。おのづから支那に派遣する學者教育者も單に一流の老大家のみを以てすることなく、寧ろ少くとも十年なり二十年なり永住する覺悟と可能性とを併有するもの、否、支那啓發のために支那の土と化する覺悟を有する若い熱心な人々を主としなくてはならない。そしてこの點から見れば、日本の國內教育に於ける焦眉の急務は、斯くの如き青年學者教育者の養成と、有爲な支那留學生の指導とでなくてはならない。

第十五章 日本教育の動向

一

今次の支那事變に際して、舉國一致國民精神總動員の實が着々として擧げられつゝあるとき、特に教育者としての私の胸を打つたものは、嘗て事變勃發當時、臨時議會に於て試みられた近衛首相の施政演説中の左の一句である。

「抑も一國が特定の他の一國を排斥侮蔑することを以てその國策となし、國民教育の方針としてかゝる思想を幼少なる兒童の頭腦にまで注入するが如きことは、古今東西の歴史において未だ嘗て類例を見ざる所で、之が將來に於ける結果を考ふる時には、獨り日支兩國の國交の爲のみならず東洋の平和延いては全世界の平和の爲に眞に寒心に堪へないものがある。かくの如き國家に對してその反省を求むる爲に、帝國が斷乎一撃を加ふるの決意をなしたることは、獨り帝國自衛の爲のみならず、正義人道の上より見ても、極めて當然のことなりと固く信じて疑はぬ。」（昭和十三年九月五日付『東京朝日新聞』號外に依る）

これは、ひとり今回の支那事變の目的理由を明かにすると共に、其の目的理由は何處までも正義人道を重んじ、眞の平和を希ふことに存する點を明かにしたばかりでなく、誤れる支那の國民教育の方針を指摘し非難することに即して、日本教育の方針を中外に宣揚した點に於て、教育と國家隨つて教育と戰爭との關係を闡明したものだからである。而も、私を以て見れば、上記の施政演説の重大性は寧ろ將來にあるといはなくてはならない。事變終結の後、支那を導いて正しき教育を行はしめるやうにするのは、眞に有終の美を濟す所以であると共に、我が國當然の本務にして權利だからである。随つて、單に目下の國狀から見て、日本が極端な國民主義に墮したとしたり、或は、事變中及び近き將來に亘り、教育を輕視してもよいと思つたりするものがあれば、それは斷じて淺見短識の訾りを免れることが出來ない。

二

改めていふまでもなく、教育の生命は將來を主とするところに存する。勿論、教育は、量的に見れば、過去の文化の傳授を主とすべきものであるが、而も其の質に於ては、これは畢竟第二義的のもので、何處までも文化の發展又は創造を主とすべきものである。そしてこれは、國家社會の飛躍

期又は大變動期に於て、特にさうである。そして昨今の日本は、正しく文字通の大飛躍期に際會しつゝあり、隨つて、國民教育の方針も亦發展的創造的であるべきことは、周知の事實である。然るに、日本の國民教育を發展的創造的ならしめるといふことは、獨自にして優秀な日本文化を創造し他の國家隨つて全世界の文化の本質的發達に積極的な寄與貢獻をいたすことに即して、日本をして文字通の「創造日本」又は「世界的日本」たらしめることでなくてはならない。殊に今次の事變の目的理由の中に前記のやうな教育的要素が重要な地位を占めて居ては尙更である。そしてこの點から見れば、私は、在來の日本の教育者が、よい意味でも悪い意味でも、國際的自覺に缺けてゐたことを遺憾と思はずにはゐられない。併しながら、今は過去を責めてゐる時期ではなく、寧ろ將來に對して備ふべき時である。そして將來に備ふべき個條の中に支那の教育を指導することも入つてゐることはいふまでもない。而もそれは決して日本のためではなくて支那のため及び全世界のためでなくてはならない。そして日本が實際に於て斯くの如き實力を得た時に、即ち、教育の力を以て支那を十分に善導し得るやうになつた時にのみ、初めて、一流の文化國家として東亞に君臨することが出来るのである。少くとも吾々教育者は、この時期が一日も早く到來することを希望しながら、當面の事變に對して善處しなくてはならない。而も、吾々教育者が當面の事變に善處するには

何處までも教育的でなくてはならない。

三

この見地より見る時に、今日吾々教育者の注意すべきことは、あらゆる方面を通して過去教育の成果を、嚴重に検討すべきことである。凡そ教育の成果を正確に理解することは難事中の難事であるが、今次のやうな國家の重大時又は非常時に際しては長短比較的に明瞭に現れるものである。而もこのためには必ずしも軍人や其の直接關係者のみではなくて、全國民を對象とすべきであると共に、過去教育の長所のみでも短所のみでもなくて、其の全體を検討しなくてはならない。この點から見て私は、文部當局乃至一般教育當局に於ては、適當な調査機關を設けてこれが研究に當るべきだとするものである。

これに次いで、私の特に重要視するのは教育の創造性である。古來、「必要は發明の母」といはれてゐるが、少くとも今こそ日本人が其の國民的創造性を十分に發揮すべき時である。事變の結果は輸入が困難又は不利となり、生活乃至文化の各方面に亘つて自給自足を國策とすべき時が正しく今日乃至今後の日本だからである。斯くして私は又、最も高い意味に於ける「國產獎勵」の必要と價

値とを力説せずにはゐられない。而も、全國民にして一旦この覺悟だにつけば、我が國にはまだまだ資源があり、まだ／＼發明發見の餘地があり、少くとも、まだ／＼無駄を省く可能性と必要性とがあるのである。而も最近の我が國民が必要以上に西洋かぶれし、實力以上に贅澤に流れてゐたことに想到する際に、私は一層その必要を痛感せずにはゐられないのである。これ私が、今こそ私が多年提唱して來た創造教育が實施さるべき時だとする所以である。

そしてこの點から見れば、私は、幼少者を必要以上に刺戟させることを國家のために憂慮するものである。勿論、この機會に於て幼少者の純な魂に忠君愛國の赤誠を印刻するのはよいが、それが極端に走つて、學業を忽にするやうなことがあつてはならない。而もこれは生活又はあらゆる方面に於て同様である。即ち、目前の事難のために國家永遠の發展に必要な國力の源泉を涸渴せしめるやうなことがあつてはならない。併しながら、軍當局は勿論、政治の局に當る人々も、多忙を極めてゐる今日に於ては、中々これら將來のことに對して十分周到な注意を拂ふ餘力がないのである。随つて、國力の涵養は、主として廣義の教育者の任でなくてはならない。そしてこの點について特に自重して欲しいのは學者殊に科學者である。將來の日本は科學に俟つところが益々多くなるからである。そしてこれは一般國民に於ても同様である。即ち、眞に國家の本質的發展に資益するやう

な方面に努力してゐる人々に對しては、それが直接國難に寄與しなくとも非難したりしないやうにあつて欲しいものである。而もこれは、健全な藝術や宗教等の方面に對しても亦同様でなくてはならない。

第十六章 新體制と創造教育

第一節 序 説

輝かしくも匆忙を極めた紀元二千六百年は過ぎて、世は今や二千七百年代に第一步を踏み入れた。吾々は新たなる要望と覺悟とを以て自他に對しなくてはならない。而もそれは、結局新體制確立運動を眞に形實完具なもの即ち新文化の創造たらしめるために最善を致す他には途がない。それにしても、思へば「新體制確立」の呼聲を聞いてより既に一歳、其の行歩は必ずしも順調駿速と稱するとは出来ない。随つて何處ともなく聞える國民の叫は決して等閑に附すべきではない。それがためには、何よりも先づ新體制の眞義を十分に理解すると共に、其の確立運動が何處まで進んでゐるか及び將來如何なる方向に進ましむべきかを検討しなくてはならない。そして私から見れば、新體制確立の眞義は、前述の如く、新文化の創造であり、且在來の確立運動は、遺憾ながら未だ形式的消極的部分的境地を脱してゐないから、將來は一刻も速かに實質的積極的全體的方面に向ふべきであり、且それは只教育を根據としてのみ始めて可能であることを忘れてはならない。

但し、新體制確立運動が其の當初に於て形式的消極的部分的であるのは必ずしも非難すべきことではない。創造は破壊に即する建設であり且時間的には破壊が建設に先んずべきであると共に、建設の第一段は形式的方面であり一舉にして全體的建設が出来るものではないのが常だからである。只私の懸念するのは、「新體制」といふ用語の與へる感じがさうであるやうに、兎もすれば、形式的破壊的部分的方面が過重されがちになる點である。少くとも在來に於ては、機構の改造に主力が注がれると共に、相當に銳角的思想行動の持主たる所謂革新的な一部の人達によつて提稱指導され且劈頭政治機構の一部的解消が行はれた事實である。

併しながら、新體制運動が形式的破壊的部分的段階に止るかぎり、其の目的の達成は見るべくもない。舊機構の解消が所謂「發展的」解消となり、政治の改造に次いで經濟及び文化の改造が企圖され、全國民の翼賛運動となりつつあるのはこれがためである。併しながら、經濟に於ける新體制が單に經濟機構の改造に止るかぎり、それは依然として形式的改造に過ぎない。即ち經濟的新體制は、只生産的方面を主とする場合に於てのみ、始めて其の實質的積極的境地に到達することが出来るのである。そしてこれは文化に於ける新體制に關しても同様である。否、文化こそは特に實質的方面を生命とするものである點に於て尙更さうである。但し、茲にいふ文化は、狹義のもの、即ち

今日の流行語としての文化、詳しくは政治・經濟・軍事・教育以外の生活分野を指すものであり、且これは妥當な用語法ではなく、寧ろ廣義に解して、人格及び自然と對立させ、人生の價值的にして客觀的—普遍的・永遠的・成果的方面を意味するものと解するのが最も正しいが、姑く一般の使用法に従ふこととする。そしてこの意味の文化は、道德・藝術・學問・宗教等を主とするが、今日の我が國に於ける新體制に關するかぎり、學問及び藝術が其の中心を形造るのは否み難き事實である。而もその兩者中特に改造の實の擧りつつあるのは學問就中科學である。併しながら、科學に於ける新體制だに、少くとも今日は未だ形式的部分的境地を脱することが出来ないのである。そしてこれは、遺憾ながら萬止むを得ないことである。嚴密な意味に於ける創造、殊に新文化の創造といふが如きは、長日月を要してのみ始めて可能であると共に、創造性に富む人々の協力を必須の條件とするからである。そして、茲に、教育上の新體制が新體制確立運動に於て重要な地位を占める所以が存する。教育こそは、最も十分な意味に於ける新體制の形成力即ち文化創造の原動力だからである。

第二節 文化創造力としての教育

教育は、複雑な現象であるが故に、種々の解釋が可能であるが、「文化創造の原動力」と解することも亦必ずしも不當ではない。併しながら、前述の如く、「文化」といふ語が曖昧であるが如く、「創造」といふ語もまた多義を有するが故に、教育が文化創造の原動力だといっただけでは、未だ教育の本質を十分に闡明することは出来ない。但し、茲には、文化について詳論する餘暇がないばかりでなく、其の意義の曖昧な點では文化よりも寧ろ創造の方がまさつてゐるので、以下、教育が文化創造の原動力である所以即ち教育的創造の意義を検討することによつて、教育上の新體制が新體制確立運動に於て如何なる地位を占めるか、及び教育上の新體制が何であるべきかを明らかにするととする。

人生の精髓は、創造即ち自己超越又は新價値の形成である。そして教育が人生の一分野であるかぎり、其の精髓も亦創造でなくてはならない。但し、教育の創造性は、人生の創造化に比しては一段低次なもので、畢竟、間接的・作用的創造即ち人格の創造である。教育は、眞善美聖といふやうな實質的價値を直接に創造する營爲ではなくて、斯くの如き實質的價値を創造する原動力としての人格の創造性を涵養助長する營爲だからである。随つて、教育的創造は、個別の普遍化即ち個別に依る普遍の限定ではなくて、普遍の個別化に即する個別の普遍化即ち文化の人格化に即する人格の

文化化でなくてはならない。實に教育は、創造性を動力とし、個性から人格を創造することを直接目的とし、自然から文化、又は、舊文化から新文化を創造することを間接目的とし、創造性の發達を自覺的及び超自覺的に可能ならしめるために、適切な素材を提供し活用する機會を出来るだけ多く持たしめる所の直接的（方法）・間接的（制度・機關）營爲である。但し、謂ふ所の人格の具體相は國民（的人格）であり、文化の具體相は國家的文化であることは改めていふまでもない。

教育の本質が、斯くの如き意味に於ける創造であるが故に、陶冶・鍊成等の諸原理も皆創造と關聯を保つてのみ始めて有意義となるのである。而も教育は、創造としての人生の第一段即ち基礎的段階を占めるものであるが故に、人生が健全な存在を保つには何時でも其の原動力とならなくてはならない。殊に、今日の如き文字通の革新期に於ては尙更である。事實、道德・學問・藝術等はいふまでもなく、政治・經濟・産業・軍事等に至るまで、眞に建設的であらうがためには、必ず教育の力に俟たなくてはならない。況んや、今日の我が國の如く、他の國民と協力して超國家的な新文化即ち新東洋文化を建設するといふやうな、永續的な洪業を成し遂げることは、到底現在の成人のみによつては不可能で、必ず、創造性の可能性の多大な未成年者全體の力に俟たなくてはならない。そして茲に、創造教育の必要な所以が存すると共に、特に國民學校に於ける創造教育の新體制に對

する使命の重且大なる所以が存する。眞の創造教育は國民教育否嚴密には幼兒の教育を基礎とすべきものだからである。

然るに、創造教育といへば所謂天才教育のやうに思ふものも少くないが決してさうではない。人間は、例外を別にしては、何れも創造性の持主であり、且この創造性の涵養助長を旨とするのが創造教育であると共に、創造性は特殊の能力ではなくて人性の精髓、詳しくは知能の精髓・一般的知能・卓越した知能又は最好條件を具備した、即ち、全生命が最も調和的な状態にある際の知能作用で、價值あるものを新しく生み出し、造り出す原動力となる人間性の發動的な緊張状態、若しくは集注作用で、所謂獨創性と呼ばれるものであり、おのづから、其の涵養助長を旨とする教育も、人性一般即ち一般的創造性の涵養助長から特殊的創造性の涵養助長に及ぶべきが順當だからである。斯くして、日本に於ける創造教育は、日本人の本質を十分に發揮することを旨とするもの以外の何ものでもないのである。

併しながら、日本人は獨自にして優秀な創造性を具備してはゐるが、而もそれには弱點も伴ふが故に、眞の創造教育はこの點にも注意しなくてはならない。そしてそれがためには、教育者は誤つた天才教育即ち速成的早教育や投機的小才子教育や出世本位の秀才教育等を排し、百折不撓・堅忍

持久・全我集注・自力精進・寄與獻身等の精神を養成することこそ、創造性涵養の眞諦であり、随つて道徳教育が創造教育の基礎であること等を十分に理會し且これを實行することが必要であると共に、教育者の養成法や待遇法を改善し、眞に力強き教育者によつて教育界の空氣を清新潑刺ならしめ、更に教育の方針もこれに副ふものでなくてはならない。

この點から見ると、國民學校令に創造的要素が相當に加味されてゐるのは欣快に堪へない。希くば鍊成の如きも、其の本旨を了解し、反創造的な形式主義や地律主義や體育萬能主義や排知主義等に墮しないやうに活用して欲しいものである。それがためには、何處までも文字通に「基礎的」鍊成に重きを置くやうにしないでなければならない。そしてこれは科學的創造性に於ても同様で、何處までも其の基礎的教育に力を注ぐべきである。創造性の發芽は大抵七歳位に於て見ることが出来るからである。然るに、世には、創造教育を單に高等教育のみに限ると見るものが少くないが、これは謬見である。但し、これは勿論、創造教育は高等教育に於て最も必要にして可能であることと矛盾するものではない。斯くして、新體制と創造教育の問題は、高等教育の方面に於ても十分注意されなくてはならない。

これ「學生と新體制」又は「學生の新體制」が、學生自身から見ても勿論、教育上の活問題とならざるを得ない所以である。況んや、狹義の新體制運動即ち政治上の新體制運動の主腦者中には、學生の參與をも考慮してゐるものがあるにおいては尙更である。

第三節 學生の新體制と教育

併しながら、學生が政治に直接參與することを以て、直ちに所謂「學生の新體制」の全義と思ふものがあるならば、それは甚だしい淺見短識である。但し、これは勿論、學生の直接的參政が學生の新體制と全然關係がないといふのではない。要は、學生の新體制は極めて深長廣大なる意義を有し、直接的參政の如きは、寧ろその單なる一小部分に過ぎないといふのみである。

抑も、一般的には、新體制が「新」體制であり、且新は動、體制は靜であるかぎり、その解釋に多義随つて疑義が包含されるのは當然である。新體制の意義が眞に確定した時には、新體制が事實に確立した時であると共に既に舊體制となつて又一層新しい體制が要められる時だからである。即ち、眞に價值ある新體制は形式であるよりも精神又は動力であり、靜であるよりも動であり、名詞的であるよりも動詞的であり、固定的であるよりも發展的であり、所與的出來合的であるよりも構成的創建的だからである。随つて新體制の提唱者たちが、完全な新體制を確立して呉れるとでも思

ふものがあるかぎり、新體制の確立は到底不可能である。そして茲に所謂「萬民の協心戮力」が要請される所以が存する。

併しながら、一口に「萬民」といつてもその間には勿論千差萬別あるが故に、その協心戮力にも亦異なる所の存すべきは白明のことである。然るに、最も嚴密な意味における新體制の確立は内容的目的的には獨自にして優秀な文化の創造であるかぎり、其の直接乃至主要部門となるものは、眞にすぐれた創造性を具へたものでなくてはならない。そして茲に、學生の新體制に於ける地位と使命との重且大なる所以が存する。獨自にして優秀な日本文化の創造に即する新東洋文化の創造は、將來相當の日子を費してのみ始めて可能であり、そして其の衝に當るものは主として今日の學生だからである。新體制の基礎を造るものは今日活躍しつゝある人々であるが、この基礎の上に眞に形實完具した、即ち理想的な新體制を樹立且それを發展させるものは主として今日の學生だからである。随つて、學生の新體制に對する關係の中心は、現在のではなくて寧ろ將來的であり、消極的ではなくて寧ろ積極的であることを忘れてはならない。今日、學生を直ちに且直接に政治に參與せしめることを以て學生の新體制の意義が盡きると思ふことが誤謬だとされるのは、蓋し、これがためである。

但し、これは勿論今日の學生は政治に関心を持つ必要がないといふことではない。所謂新體制が「萬民の大政翼賛」を一綱領とするかぎり、今日の學生も、新體制確立の曉には皇民として大政を翼賛し、而も其の責務が一般皇民に比して遙かに重大であるべきものであるかぎり、既に今日に於て政治に對する關心を強め理解を深むべきは、當然のことだからである。要は、これは、畢竟、學生の新體制に對する一部分、即ち單なる消極的・間接的・一般的關係に過ぎなくて、其積極的・直接的・特殊的關係即ち本部的本質的關係が尙この他に存するといふのみである。そしてここに「學生と新體制」が「學生の新體制」に轉すべき契機が宿ると共に、其の原理は所謂「職域奉公」に該當するもので、特に現代日本の學生にとつて獨得なもの、即ち心身の併練と「學的愛國心の涵養」又は「愛國的研究」以外の何ものでもない。

思ふに、事變又は時局の進展と共に學生の責務も逐時加重され、今や事變前に比し三重の負擔となつた。心身を併せ鍛鍊して、文武・知行兩面に亘り忠良なる皇民たり得る力を養ふことが最近に於ける學生の使命であつたが、今や其の上に新體制参加者としての新責務、即ち新文化創造の當事者であるべき責務が新たに加はりつゝあるのである。而も、いふ所の「新文化」こそは、文字通の新文化、即ちひとり日本文化本來の長所を發揮助長するばかりでなく、それを動力として更に東洋

文化本來の長所と西洋文化本來の長所とを打つて一丸とし、所謂東西文化の綜合に即してのみ可能なもの、更に詳しくは、主知的・科學的・機械的・技術的な西洋文化と主情(意)的・道德的・宗教的・藝術的(所謂)精神的な東洋文化とを綜合し、而も後者が前者を包む包括辨證的立場に於てのみ可能であり、隨つて西洋に於ては嘗て見られなかつた如く、將來に於ても恐らく見ることが出來ず、東洋に於ても、本來主知的な支那人及び印度人の力を以てしては到底不可能で、只本來情意的にして知的な日本人の手によつてのみ可能なものである。

そしてこの點から見れば、斯かる新文化の創造を内容又は目的とする新東亞の建設隨つて新體制の確立は、實に、世界的並に世界史的洪業であり、隨つて、至難に屬することではあるが、而も日本人は如何なる困難を排してもこれを成し遂ぐべき運命にあり、實は又如何なる困難を嘗め如何なる犠牲を拂つても爲し遂げばえのある聖業なのである。然るに、この難洪業を成し遂げる上に何よりも必要なのは、日本人の創造性を十分に發揮することである。然るに、新體制運動を始め、自主的積極的外交から、代用食代用品の工夫に至るまで、漸次この要求が實現されつゝあるが、それは未だ準備的領域を脱してゐない。殊に遺憾なのは、知的科學的創造性の十分な發動を見ないことである。

思ふに、日本人の創造性隨つて日本文化の長所特色が主情性に存することは周知の事實である。而もこれは、決して日本人が知的創造性を缺くといふことではない。只在來に於ては、必要な條件を缺くために其の十分な發達が見られなかつたことと、受動的・間接的・非體系的・表面的で、未だ眞に旺盛卓抜を以て評することが出來なかつたこととは否むべくもない。然るに、今や厭應なしに、知的創造性の十分な發動發達の必要にして可能な時代となつた。而もこれは學者の總動員と知育の振興とによつてのみ可能である。但し、一言に知的創造性といつても、今日の日本において特に必要なのは、いふまでもなく科學的創造性である。

然るに、幸にして現内閣は、その重大政綱の一として「教學の刷新・科學の振興」を掲げ、且科學者橋田文相をその衝に當らしめ、文相亦その使命の達成に全力を傾注してゐる。斯くして、學生の新體制は、在來の心身併鍊を強化するのに加へ、この内外の情勢の理解に基づく學問又は科學の尊重を以て、少くともその一主要内容としなくてはならぬこととなるのである。但し、學問殊に科學の過重には重大な弊害が伴ひがちである。所謂人格の陶冶、即ち品性・情操・實踐及び健康等の輕視と愛國心の冷却とが、其の最大なるものである。併しながら、これは決して正しき學問・科學・知育又は科學教育の本質的弱點ではない。否、今日の日本においては、眞の人格即ち皇民の陶冶及

び愛國心は、寧ろ強い身體と學問特に科學を一内容とし一動力とする、健康にして、知的創造性に富む日本人の養成、又は實踐的にして科學的な愛國心を意味することを忘れてはならない。前記現代日本の世界的使命を果すには勿論、資源愛護等生産の消極的國策に添ひ、身體を健康にし體力を増進するに、科學の力に俟たなくてはならないからである。但し、茲にいふ科學は、單に自然科學のみのことではなくて文化科學をも含むものであるのはいふまでもないと共に、科學的愛國心や愛國的研究は、狹義の日本學の樹立を他にしては不可能だとすることも亦偏見である。要は、魂であり、自覺であり實質的效果である。

「日本人が日本のために日本のことを研究して日本のためになる」のが最もよいのはいふまでもないが、外國のことを研究しても、眞に日本を愛し、眞に日本人の長所特色を發揮し、隨つて眞に日本の本質的價値を高めるやうな學問や研究も、やがて廣義の日本學であり愛國的研究だからである。これと共に、眞に價値ある科學的研究を行ふにも、斯くの如き愛國心と學問又は研究を綜合し、知的文化と情的文化とを統一するにも、必ず哲學の理解と活用とを要するばかりでなく、新體制問題の背景には全體主義等の「世界觀」が横たはる限り、科學の尊重はやがて哲學の尊重でなくてはならない。只内外の情勢上、特に今日重視すべきは科學就中(國防的)自然科學だといふのみである。

今や新學期は開始された。教育關係者が覺悟を新にするには、今こそ洵に絶好の機會である。希くば學生諸君は、各自、内外の情勢を達觀すると共に、一舉手一投足も祖國と世界とに影響を及ぼす新文化創造者たる自己の使命の重大性を理解し、先づ身體を鍊成し、おのづから湧き出づる高邁な意氣と旺盛な研究心を以て専攻科目にのぞみ、斯くして「職域奉公」の旨に従ひ、自己の新體制を創造することに即して、新體制の確立即ち新文化の創造に實質的積極的な寄與を致して欲しいものである。

第十七章 教育の創造性と大學の使命

第一節 序 説

憂慮すべき事象の多い現下の我が國に於て一個の快心事と思はれるのは、教育問題が國民關心の一焦點を形造りつつあることである。

勿論、古今東西を問はず、凡そ文化の改造期殊に建設期に於ては教育が特に重視されると共に、學年末及び學年始は所謂教育のシーズンとして兎角教育が一般の注目を惹きがちであるといふ點から考へれば、昨今の我が國民が教育に對して注意を拂ひつつあるといふことは、さして欣ぶべき特別な意義も持たないばかりか、其れには、教育者の轉職・教育者志望の低質減量・入學難乃至二世教育の方針變更等、種々不快な問題さへ混入してゐることに想到すれば、寧ろ憂慮すべき事象であるとしなくてはならぬ。

併しながら、更に一步を進めて、其の原由及び内容を検討する時には、依然としてこの事象を快心事とせざるを得ないのである。蓋し、現在に於ける日本人の教育的關心は、國民生活殊に「教育刷新・科學振興」といふ根本國策に根を下すと共に教育の全野を對象とする點に於て全國民共通の問題であり、隨つて、切實眞摯な寮圍氣に包まれるのに加へ、其の基調が創造的國民主義だからである。在來、乖離しがちだつた教育と政治との關係が最近頓に緊密となり、非又は反國家的と難じられがちであつた大學が、率先且最も熱心に國策に即應せんとして愛國心の養成又は日本學の創建乃至國力増進に直接役立つ學術の研究・教授を主先とし、更に、國民學校を始め高等學校や青年團等の各方面に亘り、所謂教育上の新體制を樹立せんとしつつあるのは、何れも其の證左であると共に、教育の典型が廣義の國民教育であり、教育の本質が廣義の創造に存し、更に、創造的國民主義こそ、現代日本の指導原理だからである。但し、國民教育が教育の典型だといふことは敢て説明を要しないが、教育の本質が創造だといふことは必ずしもさうではない。

第二節 教育の創造性

教育は複雑廣汎な現象であるが故に、其の解釋にも種々あるが、私は、「補助的修養」を以て其の本質と見るものである。そして、教育が補助的修養だといふことは、やがて教育が創造的現象だと云ふことに他ならない。教育は、自然的現象ではなくて人生的現象詳しくは人生の一部たる修養の

二種であり、且人生は、創造、即ち、自覺性を本質とし、辨證性を形態とし、價值性を内容とし、人格と文化（歴史と社會）とを分野とし、修養と活動とを過程とする人間生活だからである。

但し、私の意味する創造は、形式的には「自己超越」であり實質的には「新價の形成」である。自己超越とは、自己が自己の力で自己を越えることによつて、即ちよりよき自己に成ることによつて、眞の自己で在ることである。そして超越する自己も超越される自己も等しく自己であるが、其の間に次元の差があると共に、超越された自己は嘗て他日自己を超越した自己であり、超越した自己は更にまた他の自己によつて超越されるが故に、自己即超越である。事實、創造は、藝術家が作品を作り、科學者が發明發見する場合のやうに、造られたものが造るもの、又は、他を造ることによつて自己を造ることに他ならない。即ち、他によつて造られた自己が、與へられた素材を通し、自己を消費或は否定して或るものを造ると、それが、自己の造つたものであり隨つて自己でありながら、而も他として自己に對立するばかりでなく、却つて自己よりも優れ、自己の力では如何ともし難いのみか、更に倒まに自己を規制することによつて發展を促進する力を具へるもの、即ち、歴史的・社會的存在又は客觀的普遍的價值となり、隨つて他の藝術家や科學者を始め廣く人生全體に影響を及ぼすのである。斯くして、創造は、否定破壊に即する肯定建設であり、造られた

もの（過去）が造るもの（將來）を造る（現在）といふ點に於て歴史的であり、他から造られたものが他を造ることに即して自己と世界とを造るといふ點に於て社會的である。そして茲に創造が歴史的・社會的現象としての人生の精髓たる所以が存する。

併しながら、創造が歴史的・社會的だといふことは、決して單に客觀的普遍的な事象だといふことではない。創造は新價値の形成であり、且價値も形成も、等しく主觀—客觀的又は個別—普遍的な事象だからである。少くとも、形成は、「成るやうに爲る」營みであるが故に、創造は、「成る」といふ自然的客體的なものに「爲る力」としての人力即ち人間的主體的な働が發動的積極的に加はつたものでなくてはならない。創造としての人生が、價値を内容とすると共に、人格と文化とを二大分野とするのも亦これがために他ならない。

然るに、教育は、人生の一部分であるが故に、其の本質は當然創造でなくてはならないが、而も教育と人生とは部分對全體の關係を有するが故に、人生の創造性は直ちに教育の創造性ではない。然らば、謂ふ所の教育の創造性即ち教育の本質が創造だといふことは、嚴密に何を意味するであらうか。

教育が創造だといふことは、（一）教育は創造としての人生の一部分であり、（二）創造性を動力と

し、(三)個性から人格を創造することを直接目的とし、自然から文化又は舊文化から新文化を創造することを間接目的とし、(四)創造性の發動發達を自覺的及び超自覺的に可能ならしめるために、教育者が適切な素材を提供し且被教育者をしてこれを活用する機會を出來るだけ多く持たしめる所の直接的(方法)・間接的(制度・機關)營爲だといふことである。随つて、教育の創造性は、人生の創造性に比して一段低次なもの、即ち、間接的・作用的創造又は人格の創造であつて、眞善美といふやうな實質的價値を直接に創造する營爲ではない。寧ろ斯くの如き實質的價値を創造する原動力としての人格の創造性を涵養助長する營爲であり、おのづから、教育的創造は、普通の個別化に即する個別の普遍化、即ち文化の人格化に即する人格の文化化であるといはなくてはならない。但し、人生は歴史的社會的なものであり、且歴史的社會的なものとしての人生の典型は國家であるが故に、茲にいふ人格も文化も、勿論國家的人格即ち國民及び國家的文化である。そして茲に、教育が國家的人格(國民)の創造に即する國家的文化の創造を目的又は使命とすべき所以が存する。

然るに、世には、教育の目的又は使命が文化の創造であるといふことを理解しながら人格の創造であるといふことを理解し得ないものが少なくないのは遺憾である。そしてこれは畢竟、人格の本質及びそれと文化との關係を理解し得ないために他ならない。蓋し、人格は、文化の創造者、詳しく

は、價値としての人生の自己的(內在的)・個別的・主體的・直接的・動力的・中核的方面で、文化と表裏的相關的關係を有するものであると共に、個性が文化化されてのみ、即ち文化を動力・素材・場所及び目的としてのみ成立し發達するものだからである。そしてこの「個性の文化化」こそ、やがて教育以外の何ものでもない。實に、教育は、何よりも先づ被教育者の創造性を涵養助長して獨自にして優秀な人格たらしめる營みであり、且それがためには、被教育者をして文化を受容し了解し體驗させなくてはならないが、而も人格の創造は實質的及び目的的には文化の創造であるが故に、教育は、其の程度が高まるに順じて、被教育者を積極的發動的ならしめるやうにしなくてはならない。そして茲に普通教育と高等專門教育との差異が存する。

勿論、謂ふ所の創造性は、特殊の能力ではなくて、人性の本質としての知能の精髓、即ち特に卓越した知能又は最好條件下にある知能であり、且其の發動は夙に三歳位に於て見られるものであり少くとも七歳位に於て其の要因の大部分が發動を開始するものであるが故に、創造性の涵養助長は教育の全期間を串通すべきことであるが、只其の間に、一般的と特殊的、基礎的と仕上の、豫備的と本部的、間接的と直接的、消極的と積極的等の別が存するのは否み難い。そして、嚴密な意味の教育の創造性は、只高等專門の教育に於てのみ十分に發揮し充實し得るのである。これ、今日、高

等教育の創造化が特に力説せられる所以に他ならない。

第三節 大學の使命

教育は何時何處に於ても創造的であるべきであるが、而も今日の我が高等教育就中大學教育に於て特に其の必要が痛感されるのである。現代日本の最高使命が文字通に新文化の創造であり、而もそれは目睫に迫る喫緊事であるにも係らず、將に其の衝に當るべき青少年は、この使命を遂果するに適した教育即ち創造教育を其の過去に於て受けてゐないからである。

但し、一言に創造教育といつても、其の根本は被教育者の人格を創造的ならしめること、又は創造性を涵養助長すること、即ち創造的人格の養成が主でなくてはならない。そして其のためには、一般的本源的創造性の涵養を先にし、「才」を伸ばす前に「人」を造ることを旨とし、誤つても似而非天才教育即ち速成的な早教育や出世本位の小才子教育や利己的な秀才教育等に墮せず、百折不撓、堅忍持久・全我集注・勤勞精進・寄與貢獻の精神とこれに適する身體をも錬成し、如何なる地位境遇にあつても、失望悲觀も將た慢心偷安もせず、職分に應じて自己の最善を致すと共に、生ある限り向上の一路を辿り、斯くして、自己の長所特性を發揮することに即して日本及び世界の發展に貢献

することの出来る力を涵養することこそ、創造教育の眞髓である所以を銘記しなくてはならない。

併しながら、高等教育は、其の本質上知的創造性の涵養を直接乃至主要任務とするものであるが故に、現代日本の高等教育は「心身併鍊を基礎とする愛國的教學」を原理としなくてはならない。而も、當面の必要上、即ち直接的には、國防及び國力の充實上、消極的には、日本人及び日本文化殊に日本學術の短所匡救上、積極的には、東西文化の長所を打つて一丸とした新文化をも創造するといふ日本の世界的世界史的使命達成上、先づ特に國防科學中心の自然科學的方面を重んずるのは當然のことであるが、科學・科學教育・知育・教育及び理想的文化の本質並に國家永遠の發展から見れば、速成主義・實用主義・獨善孤立主義に墮することなく、一方、必ず基礎學・純理學又は根本的純理的研究を重んじ、且歐米の學問の長所を十分に擷取すると共に、他方、文化科學を重んじ且これと自然科學とを綜合するために、創造原理としての眞の基礎學、即ち、全體學・根本學・本質學乃至人間學としての哲學を活用し、斯くして、哲學的・文化學的教養に富む科學者と、科學に理會ある哲學者、即ち聰明と熱情とを併せ具へた學徒の協力に依り、眞に獨自にして優秀な、即ち特に「日本學」といふ名稱を附することなしに妥當する「眞の日本學」を樹立するやうにしなくてはならない。而も日本の最高使命は、日本人の長所たる高義又は廣義の主情性を十分に活用し、日

本國家の眞髓たる道義性を十分に發揚することによつて、全人類又は全世界の眞發展を圖ることに存するかぎり、日本獨得の文化學又は精神學、即ち哲學を始め倫理學・藝術學・教育學・心理學・政治學・國家學・法律學・經濟學・社會學等の樹立又は發展に最善を致すべきである。そして茲に大學に於ける廣義の文科の現代的使命が存する。然るに、若しも大學が目前の利害に囚はれて實用的な方面のみに全力を傾倒するならば、それは大學が自ら自己の墓穴を掘るばかりでなく、更に國家の前途を誤る所以であるといはなくてはならない。この點から見れば、今や大學は正に三重の責任を荷ふものである。即ち、和戰兩面に適する心身の錬成、直接又は近き將來の國家に役立つ學術の研究と教授及び國家乃至全世界永遠の本質的發達に役立つ學術の研究と教授こそは、やがて現代日本の大學の責任である。そして大學がこの責任を十分に果すには、結局、廣義の創造教育に俟たなくてはならないが、而も其のために何よりも緊要なことは、大學教授其のものが創造的な人格及び生活の持主たることである。

思ふに、教育者の生活こそは、造られたものが造るものと共に、他を造ることによつて自己を造るといふ創造の典型的具現であるが、就中、大學教授の生活は、所謂他を造ることが、學生の人格を創造することと、眞理即ち知的文化を創造することとを意味する點に於て、最も高い意味も亦自明の理である。

然るに、世には、これら自明の理だに了解し得ないものが少くないのは洵に遺憾なことであるが、これは畢竟、教育に關する理解を缺くがために他ならない。私が、教育及び教育學の研究に全生涯を捧げようとするのも、教育學科の特設を要望するのも、將た、多年、教育學を教育者養成機關は勿論、中等學校以上のあらゆる學校の必修科たらしむべしと主張してゐるのも、蓋しこれがために他ならぬ。

第十八章 國民學校と創造教育

第一節 國民學校の創造性

國民學校令には諸多の長所があるが、その中で、特に欣快に堪へないのは、「創造」が著しく重要視されてゐることである。

先づこれを令其のものについて見るに、教則中に、「國民科は我が國文化の特質を明にして其の創造發展に力むるの精神を養ふべし」「讀み方は……創造力を養ふに足るものたるべし」「綴り方に於ては……創造力を養ふべし」「國史の時代的様相に留意して一貫せる肇國の精神を具體的に感得把握せしむべし」「理數科は……合理的創造の精神を涵養し……皇國の使命に鑑み文化創造の任務を自覺せしむべく」又「發見工夫の態度を養ふに力むべく」「應用自在ならしむるに力むべし」「藝能科は……工夫創造の力を養ふに力むべし」「音楽は……國民音楽創造の素地たらしむべし」「工作は物品の製作に關する普通の知識技能を得しめ……工夫考案力を培ふものとす」「圖畫は……創造力を涵養するものとす」「裁縫は……工夫考案の力を養ふに力むべし」「工業は工夫考案の力を養ふも

のとす」等は、何れも創造を重視してゐることを物語るものである。

而もこれは、單に令に現はれた文字文章に於てばかりでなく、令の根本精神に於ても亦窺知する事が出来るのである。國民學校の實質的目的たる「皇民」とは「皇國の歴史的使命に即して克く皇運を扶翼し奉るべき忠良なる次代の大國民」のことであり、「内に國力を充實し、外に八紘一字の肇國精神を顯現すべき次代の大國民」のことであり、そしてこれは、具體的には、「國民精神を昂揚し、知能を啓培し、體位を向上し」、以て獨自にして優秀な日本文化を創造することに即して所謂新東亞文化を建設し、更に一步を進めて世界文化又は文化其のものゝの進歩に貢獻することの出来る國民以外の何ものでもないからである。そしてこれは、鍊成を一主要原理とし、綜合を一主要方法とする點に於ても同様である。この點から見れば、國民學校令に依る教育の一基調は、正しく創造教育であるといはなくてはならない。そして、人生の本質が創造であると共に、現代及び近き將來が最も十分な意味に於ける建設時代即ち創造の時代であるかぎり、新時代の代表的指導國たる我が國の教育の基調が創造主義的であることには、何等の不思議もないのである。否、極言すれば、我が國民教育の基調が創造主義的でなくてはならないことに關する自覺が餘りに遅かつたと稱すべきである。少くとも、昭和の初頃からこの自覺がありさへすれば、この非常時は少くとも半分の勞苦によつて

超克し得たことであらう。併しながら、今は徒に過去を悔ゆべき時ではなくて、寧ろ、如何にすれば、最も有効な國民教育の創造主義化が出来るかを具さに考察すべき時でなくてはならない。

第二節 國民教育の創造化

この問題は、先づ三面より見なくてはならない。即ち、日本人の創造性と日本人又は日本文化の理想と前者による後者の實現法とが、これである。

第一に、日本人の創造性について見るに、世にはこの點に關して誤解を懐くものが少くないが、日本人の創造性を否定するものは其の最も極端なものであると共に最も有害なものである。そしてこれは、畢竟するに、創造性に對する理解の不徹底に基因するものである。即ち、創造性は一般人性以外の特別な一能力ではなくて、人性の一作用であることを忘れてゐると共に、創造性の形態に發動的と受動的との別を始め、諸多の種類があることを知らないためである。事實、日本人が獨得の創造性を具備してゐることは、獨得の日本文化が現存してゐることに徴して明かではないか。然らば、何が果して日本人の創造性の特質か。

日本人の創造性の特質は種々あるが、其の一般的なもの挙げれば、其の形態に於ては折衷的・調和的・統一的・綜合的・内面的であり、受動的・間接的・融通無礙的であり、緩續的・激發的・非組織的であり、其の内容に於ては、パトスの・主心的・主情(意)的・主技的であり、道德的・藝術的であるといふことが出来る。

尙、この點に聯關して一言すべきは、日本人の創造性を認めながら、其の知的殊に科學的創造性を否認する見解の誤謬についてである。在來、この方面が他の方面に比し發達が遅れたのは事實であるが、而もこれは、主としてこれまでの日本人が、この方面に於て感激發奮する必要がなかつたためであることは、最近に至り、其の必要を痛感するや、俄然其の發達を見るやうになつたことは最近に於ける特許數の激増を始め、日本が世界に誇るべきものとして、醫學・本草學・兵學・地震學・數學・物理學・紙幣・灸法・鐵道・無線電信・電送寫眞・テレビジョン・潜水艦・水雷發射・火藥・砲術・紡績・造船術等を有することが、雄辯に物語つてゐるではないか。

併しながら、これを以て、直ちに日本人の創造性の基調を知的又は科學的とするならば、これまた一個の偏見たるを免れない。日本人の創造性中の實質的主要特性は、廣義の主情性に存するからである。實に、日本人の創造性は、廣義の感情的創造性である。日本文化の精髓が藝術に存するばかりでなく、日本藝術の根本特質が抒情的なところに存することは、和歌を始め、小説・戯曲・繪

畫・音樂・建築・彫刻等に徴して明かである。

然らば、斯くの如き特質を有する日本人の創造性は果して如何なる客觀的價値を有するであらうか。世には、これに對して二様の評價がある。單なる獨自性を具へてはゐるが優秀性は具へてゐないとするものと、十分な客觀的價値をも具へてゐるとするものが、即ちこれである。そして、前者は主として外國人又は外國崇拜の日本人の抱懷する評價である。

日本人の創造性が獨自的であることには何等の疑義もない。問題は、それが果して優秀であるか否かに存する。そして、在來の歴史的事實に徴する時には、必ずしも優秀性が高いといふことは出來ない。日本人及び日本が外國人乃至外國に寄與貢獻した部分が、外國人乃至外國から恩惠を受けた部分より遙に僅少だからである。併しながら、これを我が國の地理的・歴史的條件及び過去の文化の特質等から考察する時には、必ずしもさうではない。日本は、開國當時既に幾多の先進國を有し、海中に孤立し、且、比較的天産に恵まれてゐたからである。事實、日本人の創造性の價値を低劣視するものは、科學的創造性が發達してゐないことを主要根據としてゐるが、「必要は發明の母」の語が示唆するやうに、科學的創造性乃至科學の發達にはそれを促進する條件が必要であるのに、過去の日本に於ては其の必要が少かつたが、最近に至り、其の必要の度が高まるに順じて科學

的創造性乃至科學が發達したことは否み難いところではないか。而も將來は、科學的創造性や科學の發達を促進する必要が益々増大するかぎり、これを以て日本人の創造性の價値を低劣視する理由がないばかりか、寧ろこれを高優視すべきである。情的創造性と知的創造性との兼具綜合が理想的創造性の一條件であることは、古代の印度人や希臘人や現代の佛蘭西人等の例に徴して明白だからである。實に、本來、情的・藝術的な創造性に知的・科學的創造性が加味されることが、日本人にとつて、所謂「鬼に金棒」なのである。

併しながら、日本人の創造性には、決して弱點がないではない。全體に亘り、線が細く、根柢が淺く、力が弱く、一言に女性的なのは、否むべくもない。そしてこの弱點は、一は在來の幸福な境遇の結果である。實際、日本人は、これまで本當の死線を越えてはゐない。軍人や政治家や財政家や一部の國民こそ、幾度も國難を突破してはゐるが、國民の大半は必ずしもさうではない。併しながら、今や、國民は擧げて眞に未曾有の國難に直面してゐる。そしてこの國難を超克し得るものは斷じて、センチメンタルなものや、小器用なものや、輕佻浮薄な似而非才人や、井蛙的自己陶醉者ではなくて、眞に強力旺盛な創造性の持主でなくてはならない。而もこれこそやがて將來に於ける我が教育の根本方針でなくてはならない。

教育の實質的意義が「人格の創造に即する文化の創造」であるかぎり、其の基調は當然創造主義的でなくてはならない。殊に、今日乃至今後の日本に於ては、前述の如く、國民の創造性を涵養助長することを緊急の要務とするのに加へ、日本の現代的世界的使命即ち文化史的意義が、獨自にして優秀な日本文化の創造に即して新東亞の文化を創造し、兼ねて世界文化に積極的實質的寄與を致すことに存する點から見れば特にさうである。而も、新東亞文化の建設といひ、世界文化への寄與といひ、何れも在來の日本人の創造性を原動力とすべきものであると共に、科學的創造性に俟つことが特に多大であるべきことを忘れてはならない。

この他、重要なのは、心身の一致、心物の調和、團體的活動及び所謂長期建設等であるが、就中最も大切なのは、創造的愛國心の養成である。即ち、國民をして日本文化の創造に即し、東亞文化の建設並に世界文化の發展に寄與することが、愛國の實質的意義であることを自覺せしめ、且この自覺を具現することに最善を致さしめることである。而も、斯くしてこそ、創造主義的教育は、所謂似而非なる自由主義的教育に墮することを免れ得るのである。實に、創造教育は、獨自にして優秀な日本文化を創造するために被教育者の人格の創造性を涵養助長することを本旨とするものでなくてはならない。事實、文化の創造發展に貢獻しないものは、嚴密な意味の人間—人格ではないのである。

然るに、幸にして、國民學校令は、前述の如くこの意味の創造を重視するものである。随つて教育者は宜しくこの點を理解し將來の日本國民の創造性を健全に發展させ有効に活用させるやうに最善の努力をいたすべきである。そしてこれがために何よりも必要なことは、教育者自ら創造の本義に目覺め、自らの思想や生活を創造化するやうにすることである。而も一度この點に想到する時は、私の心は頓に憂慮を覺えざるを得ない。在來の師範教育は創造教育と相反することが甚だしく随つて教育者の思想や生活が非創造的であるのが常だからである。随つて、當局も、この點に周匝な注意を拂ひ、先づ教育者の思想と生活とを創造的ならしめるやうな氣運を醸生するやうにすべきである。若し夫れ國民學校の「根本原理たる「鍊成」の眞義を誤解して反創造的な形式教育を行ふが如きことがあつては、眞に由々しき大事である。尙、教科及び教法の全體化綜合化といふことも其の實質が創造である場合に於てのみ始めて十分な教育的意義を有することを忘れてはならない。

第三節 鍊成と創造

國民學校は諸多の問題を教育界に提出したが、これを教育原理の方面から見れば、皇國主義の宣

揚、知徳心身一體觀、教材教科の統合及び鍊成又は修練の重視等が特に重要な意義を有する。この中、特に私の興味深く感ずるものは、鍊成又は修練の重視である。鍊成は、教育の原理であると共に又教育者の修養の原理であるのに加へ、在來乃至今日の教育の缺陷を匡補するに適當な原理だからである。

併しながら、鍊成は、畢竟するに、教育の單なる一原理、而も、嚴密には、教育の單なる一形式的原理であると共に、一方法的原理に過ぎないが故に、これを過重する時には、教育上由々しい弊害を生ずるものであることを忘れてはならない。然るに、國民學校令に於ては、遺憾ながらこの懸念が絶無でないのは其の第一條に、「國民學校は……國民の基礎的鍊成を爲すを以て目的とす」とある如く、これを目的原理としてゐると共に、第二條に「心身を一體として教育し……各教科並に科育方途の全體的・一般的原理及び教育の實質的原理とし、更に、特に「體鍊科」を設け、且「身體を鍛鍊し精神を鍊磨」することを要旨とすることが示唆するやうに、身體的鍛鍊を通して精神的鍊磨を行ふことを旨としてゐることが物語つてゐるのである。

勿論、國民學校令に於ても、鍊成以外、鍛鍊・鍊磨・發達・涵養・陶冶・啓發・自覺・習得・會

得・育成、指導等の類語も使用されてはゐるが、其の重要性に於ては到底鍊成に比すべくもないのは、前記の諸句に徴して明かである。但し、「鍊成」が、目的的原理よりも方法的原理に、實質的原理よりも形式的原理に、特殊的原理よりも一般的原理に傾いてゐるとしなくてはならない。然らば、教育の方法的・形式的・一般的原理としての鍊成は、嚴密に何を意味するであらうか。

先づ、鍊成の字義に就いて見るに、「鍊」は、音は、「れん」で、義は「ねる」、即ち金屬を熔かして鍊ること、金屬にやきを入れてきたへること―鍛鍊・精鍊等、ねつて藥を造ること、物事に熟達させ、精巧にすること、又は、ねり上げた美しい金屬―精金等を意味するのである。「成」は、音は、「せい」又は「じやう」で、義は、「なる」又は「なす」則ち、物事が出來上る、爲上る、遂げる、成り立つ、きまる、決定する、そのものとなる、「なす」、「たひらく」又は「たひらぎ」即ち、仲間ほりす、和解する、和睦する、「をはる」―「十里四方の土地」等を意味する。

これらの字義に徴すれば、「鍊成」といふ造語は、形式的・他律的・終止的のものと解するのが妥當である。そして茲にこの語を教育的原理として使用する際に戒心を要する理由が存するのである。教育は、いふまでもなく、形式的にして實質的であり、他律的にして自律的であり、不斷の發展だからである。尤も、「成」の方面には、實質的・自律的・發展的意味が包含されてゐないでもないが

國民學校令の「鍊成」は寧ろ「鍊」に重きを置いてゐることは、この語と共に、修練及び鍛鍊といふ文字を併用してゐることに徴しても明かである。随つて、鍊成を國民學校の教育原理とする場合には、これらの缺陷を匡補するやうにしなくてはならない。殊に最近教育界の傾向が身體的鍛鍊を過重するが如くに見えるばかりか、國民學校に於ても亦其の嫌がないでもない點から見れば、一層の戒心を要するのである。

世には、身體の鍊成を精神の鍊成よりも重要なことと考へるものが多いばかりでなく、前者を後者より困難だと考へるものも少くないが、これらは何れも謬見である。身體ばかり強健でも精神の優秀がこれに伴はなければ却つて有害な人間となる場合が少くないのに反し、身體が弱くとも精神が卓越してゐるために國家社會に寄與するものが極めて多いからである。随つて、「健全な精神が健全な身體に宿る」といふよりも「健全な身體は健全な精神に俟つ」といふ方が一層妥當である。身體が健全だといふことは、健全な精神の忠僕だといふことだからである。事實、何等の精神的意義をも宿さない身體は一片の腐肉以外の何ものでもないではないか。少くとも、鍊成といふことは精神的事象である。勿論、鍛鍊は、身體にも必要であり可能である。而も、本來虚弱なものや病氣に罹つてゐるものや幼少又は老齡なもの等の身體は、體鍊科の要旨に「心身を育成し」「衛生養護に留

意し」とあるやうに、鍛鍊よりも寧ろ少くとも鍛鍊と共に育成保護療養が必要である。然るに、精神の鍛鍊は、極端な場合を除いては、何人にも、亦如何なる時期にも必要有效である。

但し、これは、身體的鍛鍊と比較してのことであつて、鍛鍊又は鍊成を普通の意味に解する時には精神的鍛鍊や鍊成にも亦制限があることを忘れてはならない。即ち、鍊は鍛えられるためには打たれなくてはならないが、而も先づ熱することと熱に堪へ得る良質であることとを要するやうに、人間も、これを鍊成するには先づ鍊成に適する素質と内實とが必要である。そして、この點から見れば、鍊成は、必ず實質的陶冶及び消極的教育の先行又は協力に俟たなくてはならない。具體的にいへば、適當な内的充實や解放や休息や保護を俟つてのみ、初めて生命力のある具體的教育原理となることが出来るのである。そして生命力ある教育原理とは、いふまでもなく、教育の本質又は使命を十分に發揮し得る原動力の義である。然るに、教育の本質又は使命とは、畢竟するに、被教育者の人格の育成に即する文化の創造以外の何ものでもないのである。そして茲に鍊成と創造との關係がある。

反説する如く、日本教育の原理としての鍊成は、方法的原理・形式的原理・乃至一般的原理である。即ち、日本國民を育成することを目的又は實質とするものである。然るに今後の日本國民は、

一方、世界無比なる日本の文化を維持し發展させると共に、他方、獨自にして優秀な東洋文化を創造する上に直接又は間接に寄與貢獻する如き廣義の創造性を具備した日本人以外の何ものでもない限り、日本教育の原理としての鍊成は創造と表裏相即するものでなくてはならない。随つて、眞に價値ある教育的鍊成は、勿論、前記の如き、他律的・終止的なものであつてはならないと共に、今日流行するやうな偏に集團的・外的なものであつてもならない。集團的・外的鍊成は、シェラー等のいふやうに、兎もすれば人間を形式化し、機械化し、皮相的にし、模倣的にするからである。そしてこの點から見れば、眞の鍊成には「獨で祈る」とか「慎獨」とか「面壁九年」とかいふやうな、よい意味の個別的・內的方面も重視されなくてはならない。實に、一人でも集團の一員としてでも、精神的にも肉體的にも、思索的にも實行的にも、戰に於ても和に於ても、將た順境にあつても逆境にあつても、日本の發展又は文化の進歩に寄與貢獻し得るやうな、眞に逞しい創造力を具備した人間を育成することを目的又は實質とする鍊成こそ、將來に於ける日本教育の原理たることが出来るのである。

これと共に、鍊成に於て警戒すべきは、形式詳しくは一面的な主意主義又は實行主義に墮しないやうにすることである。身體の鍊成に力を注いだために過勞となつたり病氣となつたりしては無意義なことである。鍊成は、目的原理ではなくて何處までも手段原理である。即ち、心身の鍊成は心身を創造的ならしめた時にのみ始めて其の價値を有するものである。そして心身を創造的ならしめるには、すぐれた内容が必要である。鍊成教育が實質的陶冶即ち廣義の知育（情意を含む）及び技育と相俟つてのみ始めて其の十分な効果を收め得るのも、これがために他ならない。然るに、今日の鍊成教育は、ともすれば形式主義に墮するやうに思はれるのは憂慮に堪へない。そしてこれは、畢竟、教育者自身の自覺が不徹底だからである。殊に、國民學校の兒童の如きは、普通の意味の鍊成を行ふには心身共に未熟であるが故に、鍊成の字義に囚はれて、兒童を大人扱ひにする結果、其の創造性を抑壓することがないやうに注意しなくてはならない。

併しながら、中等以上の教育殊に青年期の教育に於ては、嚴密な意味に於ける鍊成を施すやうにすべきは勿論である。而も、教育程度の高まるに従ひ、身體的鍊成より精神的鍊成に移るやうにすることが必要である。少くとも、今後數年、鍊成主義の國民教育が効果を奏した後は、大學又は専門學校に於ては、主力を精神的鍊成に注ぎ得るやうにすべきである。否、理想をいへば、將來に於ては、狹義の鍊成教育は高等學校程度に於て一通の効果を收め得るやうにし、大學及び専門學校に於ては、創造教育に主力を注ぎ得るやうでありたいものである。但し、今日は過渡時代であるが

故に、大學及び専門學校に於ても、鍊成と創造又は精神的鍊成と身體的鍊成とを併せ行ふべきである。實際、大學生になつて身體を鍊らなくてはならないといふことは、國民學校や中等・高等學校等の失敗でもあり又時期後れでもある。併しながら、現在の大學生は實際身體さへも鍊成されてゐないのであるから、精神の鍊成と共に身體を鍊成することも必要であるが、何處までも精神の鍊成を主とすべきことを忘れてはならない。そしてこれは教育者に於ては尙更である。身體の鍛鍊には適當な時期がある。即ち將に成熟せんとする際が最も適切である。具體的には、中等學校上級から高等學校の時代が鍊成に最も適當である。随つて國民學校に於て鍛鍊に力を注ぎ過ぎることは却つて有害である。この時代は寧ろ保育が主とならなくてはならない。少くとも、實質的に身體の原動力を涵養することを主としなくてはならない。殊にそれは身體の虚弱なものに對してさうである。これは、勿論、國民學校教育に鍛鍊が全然不要だといふのではない。そしてこのためには、體育の眞義を明かにしなくてはならない。

第四節 體育の創造化

最近、體育が著しく進歩したことは洵に喜ばしいことであるが、殊に、その精神的意義が理解さ

れ且其の充實に力が注がれるやうになつたのは、欣快の至りである。

改めていふまでもなく、教育の本質が幫助的修養であり、修養が精神を根本動力とするものであるかぎり、教育現象は凡て其の本質に於て精神的でなくてはならない。そしてこれは、體育に於ても同様である。然るに、體育が、身體の陶冶を直接目的とする點から見ても、直ちにこれを偏に身體的現象と斷ずるものが少くないのは洵に遺憾なことである。事實、心身は渾然たる生命の二面であつて、具象的には區別が不可能なものであるばかりでなく、體育の効果も其の動力及び方途も心身兩面に跨がることは周知に屬する。而も、身體の運動が複雑になればなる程精神の協力に俟つことが益々多くなるのである。そして、若しも體育が身體の健康のみを目的乃至使命とするならば、複雑な運動殊に競争や舞踊等は大部分不要に歸するのである。蓋し、これらは、其の目的に於ても、動力又は方途に於ても、精神的要素が其の精髓を形造つてゐるからである。實際、複雑な競技や舞踊等が運動よりも寧ろ藝術に屬するのは、何人も理解するところではないか。随つて、體育の當事者は、單に狹義の體育にのみ踞踏することなく、其の精神的意義を十分に充實させ其の精神的使命を十分に達成するやうにしなくてはならない。そしてこの點から見ると、國民學校令に於て「體鍊科は身體を鍛鍊し精神を練磨して潤達なる心身を育成し」とされてゐるのも、最近體操と音楽と

を兼修したり兼擔したりする教育者が次第に多くなりつつあるのも、等しく喜ばしいことである。併しながら、體育の精神的意義中、私の特に重大視するのは、其の道德的意義である。

勿論、教育の究極使命が廣義の徳育に存するといふ點から見れば、凡ての教育は其の道德的意義を重要視すべきではあるが、體育は特殊な意味に於て其の道德的意義を重要視すべきものである。

蓋し、體育は、一方に於て、種々の危険を伴ふと共に、他方に於て、被教育者の生活と廣汎な關係を有するばかりでなく、廣く一般社會に對しても亦密接な關係を有するからである。

體育が狹義の體育に止るかぎりに於てはさしたる弊害はないが、現今のやうに、體操や遊戯が運動會を始め學校の諸行事に於て重要な地位を占めるやうになつてゐる時に於ては、其の教育全體に及ぼす影響は甚大であり、隨つてこれに對する處置を誤る時には、其の弊害も決して少くないのである。事實、運動會等の前後に於ては、其の練習のために多大の時間及び勞力を費やすのは周知のことである。殊に、他校と合同に行ふ體操や遊戯や競技に於ては、選手や勝敗や應援等各種の附帯行事があるために、其の道德的意義が一層複雑多大となるのである。即ち、體操や遊戯や競技を單なる體育と見る時には、他校と合同に行ふ場合に其の効果が半減されるに對し、これを徳育と考へる時には、他の如何なる方途に依る教育よりも多大な効果を收めることが出来るのである。而も、

これらの形態に依つて行はれる運動は、單に運動を行ふものにとつて徳育的意義があるばかりではなく、其の觀覽者や應援者にとつても亦少からぬ徳育的意義が存するのである。事實、例へば、野球のリーグ戦等に關して學校當局が最も苦心するのが應援團であることは、世の周知するところではないか。

これは、勿論、男子の中等學校以上の體育のことではあるが、大體に於ては、國民學校に於ても將た女子の學校に於ても同様である。少くとも都會地に於てはさうである。都會地に於ては、青年と少年とを問はず、又男子と女子との別なく、他校と合同の體操や遊戯や競技に参加する機會が多し、少くとも、これを觀覽したり應援したり乃至は話題としたりすることが多いからである。殊に今日のやうに、社會一般が運動や遊戯や競技に深甚な注意を拂ひ興味を懷くやうになりつつある時代に於ては尙更である。隨つて、體育の當事者にして其の指導宜しきを得る時には、體操や遊戯や競技に於て青少年の品性乃至人格を陶冶すること、少くとも、これらを品性乃至人格陶冶の主要方途たらしめることが出来ると共に、體育の當事者にして其の指導宜しきを得ない時には、教育上由々しき害毒を生ずることを忘れてはならない。そして茲に、現代の體育當事者の修養上反省すべき重要問題が横たはつてゐる。

體育當事者が、健康な身體の持主であり、優れた技術者であり、更に教育法に巧みなものであるべきは、改めていふまでもない。併しながら、現代の體育當事者は、決して單にこれだけを以て足れりとしてはならない。現代の體育當事者は、更に高潔な人格乃至品性、殊に節制・忍耐・公明・質素・規律・明朗・淡泊・協同等の徳性の持主であると共に、進歩した且穩健な思想及び高尚な趣味又は洗練された感情の持主でなくてはならない。

改めていふ迄もなく、徳育の最有力手段は模範又は暗黙の感化である。然るに、體育當事者は、被教育者に接する機会が多いばかりでなく、其の赤裸々な姿を彼等に示す機会が多い點に於て、其の人格品性の被教育者に與へる影響は極めて多大である。これ私が、特に現代の體育當事者に、高潔な人格乃至品性の持主たる事を要望する所以である。而も、私は、體育の性質上、及び在來の體育當事者又は運動家の缺陷から見て、上記、節制等の徳性を重視しなくてはならない。運動家を墮落させたり、運動家及び體育當事者が社會や教育に害毒を及ぼしたりするのは、主としてこれらの徳性を缺如するがためだからである。事實、運動家や體育當事者で、だらしがなかつたり、するかつたり、おしやれや贅澤であつたり、孤獨や利己に走つたり、憂鬱であつたり、しつこかつたりしては、到底上達もしなければ其の使命を果すことも出來ないのであるが、遺憾ながら、世にはこの

種の缺陷を有する運動家や體育當事者が決して絶無ではないのである。

但し、運動家や體育當事者が質素・明朗・淡泊でなくてはならないといふことは、決して、思想が幼稚單純であつてよいといふことでも、無趣味であつたり感情が粗雑であつたりしてよいといふことでもない。否、前述の如く、これらの人々は、青少年に接觸する機会が多いと共に、其の接觸の仕方が多面的銳角的であるが故に、これらの人々が幼稚な思想の持主であるのはまだしも、不健全な思想や粗雑低劣な感情の持主である場合には、其の青少年に與へる悪影響は極めて多大であるに係らず、實際は、この種の缺陷を具有する運動家や體育當事者も亦決して少くはないのである。随つて、私はこれらの人々に對しこの方面の修養にも力を致すべきことを要望せずにはゐられない。而も、體育の使命が「獻身奉公の實踐力に培ふ」ことに存するかぎり、愛國心又は國家的自覺の涵養に力を致すべきはいふまでもない。但し、謂ふ所の愛國心や國家的自覺は、體育に於ては、世界的國際的の精神と表裏し、「國力發展の根基」又は所謂「大國民」の育成の原動力となるものであることを忘れてはならない。

我が國の體育界は、今や教育の新體制に際會してかなりの緊張を示しつつある。而も、我が國の體育界は最近長足の進歩を見つつあるとはいへ、遺憾ながら未だ其の全般に亘つて眞に一流國であ

るとすることは出来ず、随つて、技術の進歩のために最善を致すべきは勿論であるが、競技は結局高義の文化の華であるが故に、單に勝つことのみを目標とする努力練習には多くの弊害が随伴することは周知の事實である。殊に、我が國は、古來「文武兼備」を標語とし、且勝敗よりも心術や態度を重視して來た國であることは、武士道や國技といはれる角力や劍道等の立證するところである。随つて、體育關係者は、この點を十分理解し、何處までも我が國の體育を日本主義に基づく體育即ち精神本位の體育に育て上げることによつて、體育の進歩がやがて日本文化の創造及び世界文化の發展への寄與を意味するやうに努力しなくてはならない。そしてそのためには、一方、體育當事者をして修養を重んぜしめるやうにすると共に、他方、傳來の國技は勿論、野球・庭球・ダンス等の外來の競技又は遊戯等にも、日本精神の立場から嚴密な再検討を行ひ、其の本質長所を損傷しない範圍に於てこれを日本化するやうに努めなくてはならない。そしてこれは、最近頃に發展し將來益々發展するらしい女子關係の體育に於て特にさうである。況んや、體育が益々重要視され、且心育と調和すべきものとされると共に、武道が國民學校を始め必修科となつたに於てをや。

第十九章 女性生活の創造化と科學教育

第一節 模倣より創造へ

今や世界は擧げて未曾有の大轉換期に直面してゐるが、この中で、最も重大なそして光榮ある地位に立つものは、我が日本である。この千載一遇の時勢に運り合せた日本人たるものは男女老幼將た貴賤貧富を問はず何人と雖もぼんやりと日を送るべきではない。然るに、これまでの日本の女性は、兎角時勢に疎く、社會や國家のことに無關心になりがちであつたが、今日は最早それは許されない。女性と雖も日本國民、否「世界の日本國民」として生活しなければならぬ時となつたからである。所謂「新體制」なるものが、厭應なしに、女性にさへ反省と自覺とを強要しつつあるからである。事實、「七・七禁止令」といひ「八・一禁止令」といひ、所謂「贅澤は敵だ」で、自分の持つてゐるものでも、贅澤品は身に着けることが許されず、自分の髪かたちさへ、贅澤と思はれるやうな整へ方が出来なくなつた。そして、これは洵に結構なことである。

併しながら、問題は、日本の女性は果してどれだけ其の意味を理解して、これらの統制に従つてゐるかといふことになる。若しも、只禁止され命令されたから仕方なしにやるといふのでは意味がないどころか、却つて有害にさへなる。實際けばくしい色や柄の着物がいけないといふので、濫い而も高價な着物や持物をこれに代へてゐる女性が、決して少くないではないか。そしてこれは、ひとり着物や持物や化粧ばかりでなく、生活の全體に渡る女性の缺點である。即ち、其の思想も生活も無自覺であり「模倣的」だといふことである。

二

女性、殊に日本女性には、男子の及ばない長所が數々あるが、「模倣的」といふことは、正しく其の短所である。流行が女性界に於て特に力が強いのは其の證據である。事實、女性は、着物、持物は勿論、髪結び方や、日常の言葉遣ひまで、強く流行に支配されるのが常である。「流行の尖端を行く」ことがどれ程大きな女性の誇であるか、又、「流行おくれ」がどれ程女性にひげ目を感じさせるかは周知のことである。而も彼女等は、これは眞に馬鹿げたことであり時としては淺間しいことであるかを知らないのである。所謂「流行はパリから」で、それを作るものは、必ずしも尊敬すべき人でも、責任のあるものでもなく、寧ろ大抵は、商人や業者が儲けたい一方考へ出したり、或

は物好きなものや輕薄なものが、好奇心を満足させたり世間の注意を惹いたりするために工夫し使用したのが、一般の投機心に當るといふのが流行の起源だからである。随つて眞面目に考へて見ると、流行の奴隸などになつてゐられる筈がないのである。例へば、問題のパーマメントでも、夏羽織、夏シヨールでも、柄の短いバラソルでも、人を喰つたやうな口紅でも、惡どい引眉や頬紅でも、男や不良者の用ひる言葉の眞似でも、蒲團縞のやうな大柄の模様でも、囚人まがひの赤い着物でも、だらしない錦紗や錦紗まがひや、有閑高貴らしく見せたがる薄物でも、午前中からの映畫見物でも、更に、女だてらの飲酒喫煙に至つては、一寸考へただけでも、馬鹿々々しいこと、恥しいことであるのに、それに氣がつかないのが、「流行」だからである。みんなが、大勢が、上流者が、皆やるから自分もやるといふ流行心の擒となつてゐるためだからである。

三

併し、それだからといつて、一概に模倣心や流行を非難してはならない。如何にも模倣は、女性の缺點であると共に幼少者や野蠻人や殊に動物の特性である。世に「猿眞似」といふ語がある通り、猿は模倣の名手である。而も、動物でも人間でも、實は模倣心があればこそ、物を覚え、物に上達するのである。

學習は模倣から始まるからである。實際、言葉でも禮儀作法でも讀書算術でも、否高尙困難な學問技術さへ、模倣の段階を経ないで理解し上達するものは一つもないのである。只問題は、「模倣にのみ止るか、それとも模倣を一步出るか」、又は「悪いものを真似るか、善いものを真似るか」にある。そして模倣にのみ止つたり、悪いものを真似たりするものは駄目なのである。真似るならば善いものを真似ると共に、模範とするものの真髓を理解し、これを我がものとし、更に一工夫して、所謂新機軸を出せばよいのである。そして、これこそ正しくいふ所の創造的模倣、否「創造」其のものなのである。實際、どれ程すぐれた人でも、誰にも學ばず、何も習はず、少しも模倣しないで、立派なものを文字通に一人で工夫考案發見發明—創造し得るものではないのである。教育や修養とは結局この意味の模倣である。創造せんがための模倣であり、創造的模倣である。そして、模倣が女性の一缺點だといはれるのは、女性の模倣が、模倣のための模倣に止つてしまひ、猿真似に過ぎないからである。これはまことに惜しいことである。女性は、おしなべて、男性よりも模倣はうまい。これは轉住した際、女性の方が新しい土地の言葉や風習にはやく習熟することに徴しても明かである。そしてこれは寧ろ女性の長所である。少くともこれが一步進んで、一工夫を凝らし、新機軸を出すことが出來さへすれば、女性の一大長所となるのであるが、遺憾ながら模倣は單なる模倣に止

つてゐるのが常である。而もこの缺點は、一刻も早く矯正しなくてはならない。これは、ひとり女性のみ缺點や損失ではなくて、實は、日本人全體の一大缺點であり、そしてこれを矯正するのしなければ、日本は現下の非常時を超克することが出來ない點から考へれば、決して其の儘に放任して置くことが出來ない一大損失である。私が茲に敢て模倣より創造へと絶叫せざるを得ないのも、畢竟、これがために他ならぬ。

四

さて、「創造」といふと、一見何か非常に大げさな、又非常に困難なことで、一般の人間には、何の関係もないことのやうに思はれるかも知れないが、決してさうではない。大まかにいへば、人生即ち私共の生活其のものが創造だからである。

勿論、人間は、誰でも親から生れたもので、自分で自分を生んだものでない點では、被造物即ち造られたものである。而も、人間はひとり親から生んで貰つたばかりでなく、一人前の人間になるには、君の恩國の恩は申すまでもなく、いろ／＼な人の世話になる點に於ては、何處までも「造られたもの」である。それにも拘らず、自分で話す言葉は自分のものであり、自分で描く繪は自分のものであり、自分で築いた積木は自分のものである。即ち大まかにいへば、自分の造つたもので

ある。少くとも、「自分でやつた」といふ自覺のある言行は皆自分の造つたものである。それなればこそ、責任もあり、よい加減に話したり行つたりが出来ないのである。斯くして人間は皆造られて造るものである。併し、どれ程自覺を持ち責任を感じて言動し、且どれ程新しいものを造つても、それが、單に自分のためにしかならないものであれば本當の創造とはいへない。他人のため、世のため、國のためになるやうな價值のあるものを新しく生み出し造り出してこそ、始めて本當に創造したといふことが出来るのである。偉人とか天才とか發明家とか發見家とか工夫家とか考案家とかいふ人たちが、世の尊敬を受け、且かういふ人達の思想や生活が「創造的」だと思はれるのは、これがためである。併しながらかういふすぐれた人達がどれ程すぐれた發明や發見や工夫や考案をしなくても、一般世人がこれを理解しこれを活用しなければ、これらの人達の努力は本當の創造にはならないのである。而も、一般世人が、これらの人達の努力を活用するにはやはり一般世人に相當した工夫考案が必要である。そしてこの工夫考案其のこそ、實は一般人の創造であると共に、其のためには、何よりも先づすぐれた人達の創見を十分に理解し模倣することが必要である。例へば、「新秩序の建設」とか「新體制の確立」とかいふやうなことは、すなはち今日に於ける「創造」であるが、これが實を結ぶには、全國民が自分の力相應にこの精神を自分の生活に活用しなくてはな

らない。この點から見れば、最近各方面に「我等が新體制」といふ語が流行してゐるのは、洵に喜ばしいことであるが、只心配なのは、前に述べたやうに、それが單なる「流行」に終りはしないかといふことである。否、今度だけは斷じてさうあつては、さうさしてはならないのである。日本が、この未曾有の非常時を超克して多年待望的世界的日本になるのはこの時を措いてはないと共に、そのためには世界一の、即ち獨自にして優秀な新日本文化を創造する他には途がないし、そしてそれは只全國民が一億一心となつて、獨自にして優秀な日本文化を造つて行かうとしてのみ出来るからである。今日、利己心が蛇蝎視されるのもこれがためであり、奢侈贅澤や外國崇拜が非難されるのもこれがためである。使ひ古された「お國のため」といふ言葉が今日程深い意味を持つやうになつたことがないのも亦これがために他ならない。「お國のため」とは「世界一の日本を造るため」といふことだからである。それだから、代用食を「造る」にも張合があり、スフの洗濯法を「考案する」のも光榮なのである。金がないから材料がないから生活を楽しくすることが出来ないといふ人は、實は本當の生活を知らないあはれな愚かな人である。頭を働かし工夫考案を凝らして、自分のためにも人のためお國のためにもなるものを、新たに造り出して行く生活こそ、本當に意義のある生活――創造生活だからである。

五

物は考へやうである。今日は洵に不自由な時だといへばさうもいへるが、日本人が長い間誤解されてゐた「模倣的日本人」の悪名をふり捨てて、「創造的日本人」たる光榮を擔ふべき又擔ひ得る時が今だと考へれば、今日こそ、眞に生き甲斐のある、働きばえのする時である。殊にこれは日本の女性にとつてはさうである。女性が、男性と伍し、男性と力を協せてよい日本を創造し、よい日本を造り上げるばかりでなく、この創造日本の永遠的發達を成し遂げるに必要な次代の國民の母となる時が今日だといふ點から見ても、今日の日本女性は、其の思想も生活も創造的にしなくてはならないのである。そしてこの點さへ十分に自覺されれば、日本女性の生活は忽ちにして活氣と明朗さとを増して來なくてはならない。髪かたちでも、化粧でも、着物持物でも、食事でも、住居でも、即ち生活の全面に亘つて、工夫考案創造の餘地が無限に藏されてゐるからである。希くば、聰明なそして特に若い女性は、物資の不足などを氣にする閑で、自分の知性を十分に働かして、小さくは自分の生活を高め深めるため、大きくは獨自にして優秀な日本文化を創造するために、髪の結びぶりにも顔の化粧にも、獨自の工夫を凝らして欲しいものである。

第二節 女性と科學及科學教育

一

稀有の大轉換期に際會しつつある今日、恐らくは、何人も人生に對して眞摯な考察を運らすと共に自己の責任の頓に重きを加へたことを痛感しつつあることと思ふが、私は、日本の婦人に於て特に然るを覺えるのである。二十世紀の最大使命たる「新文化の創造」に對して最も大なる責任を擔ふものは日本人であると共に、この日本人の責任の遂果に最も深い關係を有するものは婦人だからである。

勿論、新文化の創造は、全世界の責任であると共に全人類の協力によつてのみ可能であるが、而も、所謂新文化の特色が在來の東洋文化と西洋文化とを綜合したものであり、且それは東洋文化に依つて西洋文化を包む形に於てのみ可能であるばかりでなく、東洋文化の精髓と西洋文化の精髓とを等しく十分に把握したもによつてのみ可能であるのに、斯くの如き條件を具備するものは、世界に只日本人があるだけであることを忘れてはならない。併しながら、嚴密に考察すれば、日本人が斯くの如き大使命を果すことは極めて困難なことである。在來乃至今日の日本人には種々の弱點

が存し、殊に、科學的創造性が缺けてゐるからである。所謂西洋文化は概言すれば科學的文化であり、隨つて日本人にして科學的創造性を缺く時には、到底西洋文化と東洋文化との綜合は不可能だからである。そしてこの點から見れば、最近、文部當局を始め、各方面に科學及科學教育尊重の聲を聞き且それが着々事實化されつつあるのは、洵に欣快に堪へない。而も、科學の振興が單に専門家のみの努力によつて可能であるが如くに考へるものが少くないのは遺憾である。科學が國民生活の全面に密接な關係を有するばかりでなく、國民の科學的水準を高めることが科學振興の一必須條件だからである。普通教育に於ける科學教育が特に重視されなくてはならないと共に、「婦人と科學」の問題が頗る其の重要性を加へなくてはならないのも、畢竟、これがために他ならない。

二

本來、婦人は感情を生命とするものであるだけ、科學的でないのが常であり、殊に日本婦人に於てさうである。そしてこれは寧ろ婦人の長所として何處までも擁護し助成すべきものである。少くとも、日本婦人の感情は如何なる國の婦人にもまさるものであるが故に益々これを助成しなくてはならない。併しながら、婦人が科學的でないこと其自身は決して婦人の長所ではない。それは、何よりも先づ日常生活に不便を來すことによつて、ひとり婦人自身の損害となるばかりでなく、男子

の生活にも惡影響を及ぼすからである。殊に今日の日本のやうに、資源の愛護、物資の活用、代用品の工夫等が必要であり、且その當面の責任者が婦人である國に於ては尙更である、實際、日本婦人が非科學的であるために少からぬ損害を受けてゐることは、迷信等に於て特に顯著に現れてゐる。例へば、年廻りや方角や占巫や衛生や治病藥に關する迷信が、一身は勿論一家や他人をも不幸に墮すことは決して少くないではないか。

併しながら、一層重要なことは、科學的でない婦人の、子女及び其の教育に及ぼす惡影響である。本來、科學的知能は遺傳的であり、隨つて優れた科學者は科學的知能の優れた母を有するのは、エディソンの場合を始め、幾多の事實の例證するところである。而もこれは、教育に於ても同様で、科學的知能は比較的早く發動するが故に、母にして科學的理解を缺く時には折角優秀な科學的素質を具備する兒童の發達を阻止することとなるのである。殊に、今日の我が國の如く、科學的創造性に富む國民を一人でも多く生み且育てることを國策的必要とする國に於ては、單に婦人の科學的知識が教育と密接な關係があるばかりでなく、種族改良とも密接な關係を有し、隨つて結婚の改善にも活用されなくてはならない。實際、科學的知識特に血統や素質や適性や年齢等に關する科學的知識を缺くために不幸な結婚生活を營むものが如何程多いかは、説明を俟たない所であらう。そして

これは、所謂新東亞の建設にも關係する重要問題である。新東亞の建設には日本人と日本人以外の民族との結婚問題が隨伴するからである。而も、劣等民族との結婚が優等民族を劣性化するのが常であることを忘れてはならない。更に、これは、人口増殖問題に就ても同様で、只多く産みさへすればよいと思つてはならないのである。知能優秀者は多産者から生れることも多いが、而も知能低劣者及び不良者・病弱者も亦多産者から生れるのが常だからである。

この點から見て、私の特に遺憾に思ふことは、科學的知能の優れた日本の婦人中に獨身で過すものが少くないことである。單に、自分が優れた科學者になるだけでなく、科學的知能の優れた子を生み且育てることが、一層意義あることであるのは自明事だからである。學問あり優秀な素質を具へた婦人の晩婚も亦憂慮すべきことである。

而も、婦人と科學との關係は、單にこれだけに盡きない。婦人が科學的精神を活用するといふ重要なことが尙残つてゐるからである。最近科學する心といふ語を用ゐるものが少くないが、實際、今日の日本婦人に必要なものの一つは、科學する心即ち科學的精神である。そして謂ふ所の科學的精神は、第一に、學ぶ心即ち研究心・修養心又は進歩的精神を意味する。

思ふに、在來の日本婦人が男子にも或は歐米婦人にも知的に劣つてゐたのは、本質的に頭腦が惡

いためではなくて、寧ろ學校教育終了後の研究修養が不足なためであることは、幾多の事實の例證するところである。そしてこれは特に科學的方面に於てさうである。勿論、これはひとり婦人のみの罪ではなくて學校教育や社會殊に出版界などの責任である。在來の女子教育は、注入主義や暗記主義や文科過重に墮し、自學自修心や學問的興味などを十分に啓培しないと共に、婦人の自學自修殊に科學的研究に適當な雜誌や書籍が少かつたからである。隨つて、將來は婦人の自覺を高めると共に、上記教育や出版上の難點をも匡救するやうにしなければならない。

第二に、科學的精神は合理的精神である。合理的精神とは、個人の好惡や利害得失によつて曲げることの出来ない道理を認め、且これに従ふ心である。科學的精神が客觀的精神とも呼ばれるのはこれがためである。然るに、婦人は、兎もすれば主觀的となり、物の道理よりも自分の好惡や利害得失を先にしがちであるが、これは斷じて缺點である。茲に、今日のやうに、所謂「全體」が尊ばれ、協力や大同團結が要求され、滅私奉公や公益優先が叫ばれる時代に於ては尙更である。勿論、世の中、殊に婦人の生活には道理だけで行かない場合も少くないから、科學的精神の過重は排すべきであるが、而も日本の婦人はまだ、道理を重んずるやうでなくてはならない。

三

科學の尊重と活用との必要は、日本婦人の全體に亘つてのことであるが、その中で特に切實緊急を覺えるのは、教育就中科學教育に直接關與する婦人であることは改めていふまでもない。庶幾くば、これらの婦人は、自己の使命の重大性を十分に自覺し、其の遂果のために最善の努力を致して欲しいものである。そして其のためには、何よりも先づ、在來の日本婦人の科學的知能が劣つてゐたのは本質的缺點ではなくて、誤れる教育の結果であることを理解しなくてはならない。日本婦人が少くとも相當の科學的知能を具備することは、廣義の理科專攻及び專攻希望の婦人がかなりに多いばかりか、婦人にして學位を有するものが凡て理科系統に屬するものであること等に徴しても明かだからである。

これに次いで必要なことは、理科的素質と文科的素質とが全然別であるといふ考を捨てることである。勿論、兩者間に相違があるのは否み難き事實であるが、優秀なものは兩者を兼ね得ることも亦例證に乏しくはないからである。斯くして、いふ所の「科學」も、單に「自然科學」と限定せず、廣義の「科學」即ち自然科學と文化科學とを併せ含むものと見ることが必要であると共に、優秀な素質を備へた婦人は、理科—自然科學の方面だけに向はないで、文科—文化科學の方面に於ても新天地を開拓するやうにしなくてはならない。そして、日本婦人の開拓に適當な文化科學的新天地と

しては、文學殊に國文學・國史・心理學（婦人心理學及び兒童心理學）及び藝術學方面であり、理科と文科とに跨るものとしては家事がある。そして茲に、家事科の重要性がある。國民學校令に於て、家事が裁縫科と共に、「藝能科」中に編成されて「理數科」に編入されなかつた理由は、十分に反省さるべきである。日本の家事は何處までも日本人の生活に基づくべきものであり、隨つて其の研究も亦日本獨得のものでなくてはならない。私が、家事を以て優秀な素質を具備する日本婦人が其の力量を發揮し得る新天地の一と見るのも亦これがためである。少くとも家事擔當の教員諸君は、一方、次代の國民の養成のため、他方、自分自身の研究のために、本科の眞使命と新意義とを十分に理解し、所謂「教學一體」、即ち教へることによつて學び、學ぶことによつて教へるの實を擧げなくてはならない。そして、家事擔當者にしてこの理解に徹底するならば、研究の素材には決して不足しない筈である。私は、所謂日本學の一分科としての「日本家事學」が優れた日本婦人の手によつて見事創建される日が一刻も速に來らんことを要望して止まないものである。

第三節 新日本の女性教育者に望む

—

斷えず懸念し反復警戒した教育界の危機が遂に來た。教育者及び教育志望者の減員と低質とが、今、最も悪い時期に於て、事實となつて現出した。

理論的に見ても實際的に見ても、教育の最大要件が優秀な教育者であることは、周知の事實である。随つて、苟くも教育の効果を高めんとするならば、何よりも前に、優秀な教育者を出来るだけ多く養成するやうにしなければならぬ。殊に、今日の我が國のやうに教育の任務が頓に重きを加へつつあるばかりでなく、教育其のものが根本的改造を要するやうな時に於ては尙更である。私が國民學校令の實施が確實となるや、あらゆる機會を利用して教育者の養成と再教育、殊に師範教育の改善の必要を力説高調したのも、蓋しこれがために他ならない。

然るに、私の要求警戒が未だ事實化されない中に、教育界の事態は頓に險惡の度を加へ、今や殆ど拾收し難き有様となつたのは洵に痛歎の極みである。而も、これは斷じて徒に傍觀すべきものではない。直接には教育の盛衰に關係し、間接には國運の消長にも影響する重大問題だからである。實際、差し當り困るのは國民學校のことである。「劃期的」と評されるこの新制度の實施に際し、其の任に當るべき教育者がどしどし他に轉ずるばかりか、其の後繼者たるべき師範學校入學志望者が質量共に著しく低減し、而も其の主要理由が待遇の菲薄に存するといふことが、教育界は兎もあれ、

純眞な兒童や眞摯な父兄に對して大なる惡影響を及ぼすのは、この新制度の前途を暗瞻たらしめるものでなくて何であらうか。心ある人達が衷心憂慮し、遂に議會の問題とさへしたのも、遺憾ながら洵に當然なことといはなくてはならない。随つて文教の當局者は、一刻も速に其の對策を講ずべきである。

併しながら、文教當局の對策にはおのづから制限があることを忘れてはならない。即ち、當局の爲し得ることは、單に將來のことと副次的のこととのみに限られる。師範學校の昇格も、教育者や師範生の待遇の改善も、重大は重大であるが、結局將來に屬することか又は表面的のことに過ぎないからである。然るに、問題は一層切實で一刻も忽せに出來ないと共に、畢竟、教育者及び教育志望者の魂の問題であるかぎり、吾々は、一方、當局を信頼し鞭撻して上記教育者の待遇と養成法とを出来るだけ十分に且出来るだけ速に改善するやうに努めると共に、他方、現に教職に在る人々の自覺と激奮とを要望せざるを得ないのである。而もこの點から見て特に反省を促したいのは、女性教育者である。

二

勿論、今日の日本は、文字通に國民總動員の時代であるが如く、教育者も亦其の全員を擧げて自

覺と發奮とが要望されつゝある時である。事實、在來に於ては最も浮世離れをして、所謂「象牙の塔」に立て籠るのを常とした大學關係の教育者も、殆ど例外なく、其の研究及び教授が國策に即應することを要請せられ、殊に、科學就中國防科學に直接關係あるものの如きは、全く軍人同様の覺悟で研究や教授に従事しつつあるのは否み難きところである。只、彼等は、其の地位も待遇も他の教育者に比べては幾分良好なために、この時局に際會しても、大抵は其の天職に安んずることが出来るのみである。

然るに、小中學校關係の教育者に於ては、これと異り、前述の如き状態であるのに加へ、兒童生徒は續々と増加するが故に、當然其の補充を計らなくてはならない。そして茲に女性教育者の責任が最近頃に其の大を加へる原因が横たはつてゐる。女性教育者の數が俄に増加したばかりでなく、在來は男性教育者の補助に過ぎなかつたものが、文字通に其の同格的協力者となり、隨つて其の責務も増大し、更に、事情によつては寧ろ男性教育者に代り、國民教育の主役を演ずるものさへ少くなく、且この傾向は次第に強まりつゝあるからである。私が、敢て、特に女性教育者の自覺と奮起とを要望するのも、決して偶然ではないであらう。

思ふに、女性は、ベスタロツツイやスエブランガー等の説を俟つまでもなく、本來、最も教育者に適した素質の持主である。愛を生命とし、他を生かすことを通して自ら生きることを特色とする所謂「社會型」に屬するのが、女性だからである。そしてこれは日本の女性に於て特にさうである。然るに、教育界の實狀に徴すれば、遺憾ながらこの理論に背反する事實が少くない。「女教師」が尊敬の對象であるよりも寧ろ非難的となる場合が多いのは、其の證左でなくて何であらうか。そしてこれは、畢竟するに、女性教育者の生活及び修養に缺陷があることを物語るものに他ならない。事實、男性の師範教育にだに多くの缺陷があるから、女性の師範教育に更に多くの弱點が伴ふのは察知するに困難ではない。女子師範教育の局に當るものの多くは、師範教育を受けた人達だからである。

然らば、在來乃至今日に於ける女性教育者の共通主要缺點は果して何であらうか。畢竟するに、女性としての眞長所が減殺されて中性化してゐると共に、女性としての短所が匡救されてゐないことが、即ちこれである。これを具體的にいへば、眞の意味の愛情に乏しいこと、悪い意味で感情的であり、私的、一面的であり、隨つて、社會的、國家的、世界的なことに關心を持たないこと、向上心に乏しく、眼前の些事に囚はれ將來の見透しや遠大な理想や要望を缺くこと、學問殊に科學に對する興味が薄く、政治法律等に關する理解が淺いこと、思想行動共に徹底的組織的及び創造的で

ないこと、生理的缺陷を有すること、家庭的煩累が多いこと等が、其の主要なものである。

而もこれらの缺陷は、昨今のやうな非常時や男性教育者と文字通の協力を必要とする時に於ては特に其の弊害が顯著となるのである。少くとも、男女を問はず、今日及び近き將來に於て國民教育の重任を十分に果し得るためには、眞の意味の教育愛即ちひとり父性愛と母性愛とを兼ねるばかりでなく、更に所謂「文化愛」をも併せ具へなくてはならない。そして謂ふ所の文化愛は、文化の創造を内容とし、且文化は、價值生活の全部即ち學問・道德・藝術・宗教・政治・經濟・産業から軍事警察に到るまでを包括するものであるが故に、普通の愛と異り、悪い意味で感情的であるものが持つことの困難なものである。而も、今日及び今後に於ける日本の國民教育は、所謂「國民の基礎的鍊成」を目的とするものであり、且將來の日本國民は世界的國民であるが故に、この目的を達成するには、被教育者をして、日本と共に東亞及び世界の大事勢に通ぜしめることが必要であり、おのづから學問や政治に興味が薄く、社會や國家や世界に對する關心が乏しくては、到底國民教育者たるの使命を遂果することが出来ないのである。殊に、今日の日本は、所謂新文化の創造を使命とするものであり、そしてこれは只國民教育を動力としてのみ達成し得るものであるかぎり、任に國民教育にあるものは、被教育者をして高遠なる理想を懷抱せしめ強大なる創造力を具備せしめるやう

にするために、自ら理想と創造力の持主とならなくてはならない。殊に心身一如又は心身併鍊が將來の國民教育の一特色であるかぎり、生理的缺陷は決して輕視すべきものではなく、行事や勤務時間が増加しつつある今日に於て家庭的煩累も亦教育者の使命を完遂する上に妨げとなるのは否み難きところである。随つて、女性教育者にして、眞に自己の使命を遂果するには重大なる覺悟を要するのである。實に、今こそ、女性教育者奮起の時である。女性教育者が上記の缺陷を根本的に匡救し、其の長所を十分に發揮することに即して、教育界の危機を超克すると共に、新日本の理想を實現する原動力を涵養すべき時は正しく今日である。無智な少女すら、今や銃後の守を堅めるために涙ぐましい努力をしてゐるではないか。苟くも、國民教育の重任を双肩に擔ふ教育女性たるものがこの重大時期に直面して晏如たり得る筈はない。殊に、男性國民の大半は、今文字通に一死盡忠の覺悟を堅めてゐることを思へば、他は兎もあれ、教育女性だけは、自分の使命と名譽とにかけても奮起一番しなくてはならないのである。そして私は、特にこれを家事裁縫擔任の女性教育者に切望して止まないものである。

三

最近の日本に於ける一注目事は「家」の重視である。「家」が日本獨得のものであるかぎり、あら

ゆる方面に於て日本文化の獨自性が注視されつつある今日、「家」が尊重されるやうになつたのは洵に當然のことである。而も日本の「家」の特色が道德的な所に存するが故に「家」の尊重はやがて「家族道德」の尊重でなくてはならない。そして茲に家事科擔任者の自覺が新に要望さるべき所以が横たはつてゐる。家事科は最早單なる實用的教科又は單なる應用理科でないことは、家事科が藝能科中の一科となると共に、「我が國家庭生活に於ける女子の任務を知らしめ實務を習得せしめ婦徳の涵養に資するものとす」と規定され、更に、齊家・報國の精神・禮法の重視等が高調されてゐることに徴して明かである。況んや、家事科は、理數科と相俟つて科學的創造性の涵養にも努むべきに於てをや。そしてこれは裁縫科に於ても亦略同様である。裁縫科に於ても、婦徳の涵養・齊家・報國の精神・工夫・考案力の重視等が力説されてゐるからである。而もこれを現代國民教育の最高目的たる獨自にして優秀な日本文化の創造といふ點から見れば、家事及び裁縫科擔任者の責任が一層の大を加へ、隨つて其の修養も亦一段重大なものが必要であるといはなくてはならない。この兩科には、日本的なもの又は創造的な要素が特に多大であり、而も兩科をして眞に日本的・創造的ならしめるには、必ず外國の家事裁縫に對する理解を有すると共に、全體としての日本人及び日本文化をも理解し、且日本及び世界の將來に對する見透しと理想とを持たなくてはならないからである。

而も日本及び世界の將來は容易に端睨し得ないが、少くとも日本の女性の生活に大なる革新を要することだけは斷言し得る。隨つて眞に自己の職責を自覺する女性教育者は、何よりも先づこの重大問題に關して透徹した理解を持つやうにしなくてはならない。敢て問ふ。日本の女性よ、卿等は果して如何に自己の生活を革新しようとしてゐるであらうか。今や世界は刻々と變化しつつある。そして日本の世界に對する使命は日一日と増大しつつある。そして日本の將來を背負ふものは男性ではなくて寧ろ女性である點から見れば、女性教育者の責任は愈々其の重きを加へるのである。これ、私が、反復卿等の自覺と奮起とを要望せずにはゐられない所以である。

第二十章 公民教育の創造化

第一節 大國民的公民教育

一

我が日本は實に今千歳一遇の時期に直面しつゝある。今は正しく國家的飛躍の時である。教育が時代の反映であると共に新時代の原動力であるかぎり、飛躍期には飛躍期の教育がなくてはならない。而もこれは、公民教育といふが如き、本來社會や時代との關係の特に密接な教科に於て一層其の然るを覺えるのである。當局に於て教育制度の根本的改造が企圖されつゝあるのは洵に時宜を得たことといはなくてはならない。但し、これを嚴密な立場から考察すれば、其の方針の上に尙省慮を要するものがないでもない。そして其の一つは日本の將來に於ける國際的地位又は世界的使命に關する理解が眞に徹底してゐるかどうかといふ點である。

二

改めていふまでもなく、今や日本は、文字通に世界無比の大國となりつゝある。隨つて國家は勿

論、國民の一舉手一投足だに國際的世界的意義を包含するやうになつて來た。而もこれは、單に大都市や一地方のみに限られたことでもなく、又特殊の階級や職業のみと定まつたことでもなくて、眞に全國的・全國民的のことである。蓋し、地理的にいつても支那の全國と日本の全國との直接交渉が必要となるのは勿論、間接には、英・獨・伊・米・露・佛等との交渉が頗る近密繁多の度を加へるばかりか、更にこれらの諸國民と交渉する日本人は、特に下層階級に於て其の多きを加へるからである。

然るに、本來日本人は、外國人との交渉の拙劣な國民である。而もこれは相當に教養のある國民に於ても同様である。即ち、崇外的になるか、排他的になるかの何れかが、日本人の外國人に對する常套的態度である。然るに、今や我が國は稀有の大飛躍をなしつゝある結果、外國人又は外國に對する態度も相當顯著な變化を示し、自己を優者として持するやうになりつゝあることは否み難き事實である。これは、事變下に於てはさしたる支障もないが、平和克復後に於ては十分な戒心を要することである。そして茲に、現代教育改造の一要點が伏在する。

實に、日本國民は、眞の意味に於ける「大國民」たるの修養が必要な時代である。そして、眞の意味に於ける「大國民」とはいふまでもなく、獨自にして優秀な國民文化の創造發展に即して世界

文化の創造發展に寄與貢獻する意志と實力とを具備する國民の義である。然るに、遺憾ながら、在來乃至今日の日本國民の大部分にはこの意味に於ける大國民の修養が缺けてゐるのは蔽ひ難い。而も斯くの如き本質的的根本的な方面ばかりではなく、一層皮相的末梢的な方面、即ち、「交際」といふやうな方面に於てだに、遺憾ながら前記歐米諸國民に比して一籌を輸してゐるのである。殊に、これは外國人相手の職業に従事する人々に於てさうである。但し、これが、在來のやうに、日本が後進國として彼等の後塵を拜してゐる中はさしたる弊害もなかつたが、戰捷國として將た東亞の盟主として、對等に、若しくは一段高優な立場に於て外國人と交渉をする場合には、僅少な缺點といへども大なる障害となることは疑ふべくもないのである。實際、今や我が國民は、國際人としての知識と品性とを具備することなしには、外國人と交渉して國家の發展に貢獻することが出來ないやうになつて來た。随つて、今後の我が教育には、單に知育だけについて見ても、日本を知ると共に諸外國を知るといふ二通の負擔が必要となつて來るのである。そしてこれは公民教育に於て特にさうである。

これを具體的にいへば、法律的知識に於ても政治的知識に於ても將た經濟的知識に於ても、單に自國のものを知つただけでは足らないのである。これは風俗習慣禮儀作法といふやうなものに於ても同様である。而も最も必要なのは、大國民的精神及び大國民的原理である。けちな、線の細い、島國根性では國運の進展に寄與することは覺束ない。併しながら、何處までも日本人の獨自性は保持發揮しなくてはならない。即ち、在來のやうに無智蒙昧であつたり、徒に大言壯語したり、粗野な言動を敢てしたりするものでも駄目である。日本的にして而も世界的な國民のみが、飛躍期日本の中堅を形造るものでなくてはならない。

併しながら、これは決して直接外國人と交渉したり外國に生活したりするものの教育のみに必要なことではない。日本國家が世界的となつたかぎり、直接と間接とを問はず、又個人と團體とを問はず、日本國民の生活は必ず何等かの意味に於て國際的結果を惹起するものである。殊に、將來は日本に來る外國人の數が益々増加するので、日本人の言動の國際的生活に及ぼす影響は愈々其の大を加へるのである。そしてこれは國內生活に於ても亦同様である。増税や兵役義務の擴大や社會的奉仕の強化や資源の愛護等所謂建設の問題も、日本の國際的地位や世界的使命を十分に了解することなくしては、決して徹底的效果を收めることが出來ないからである。

而も特に重大視すべきは、女子の公民教育である。在來の日本婦人は母であり娘であつて「公民」ではなかつたが、事變以來各方面に於て、公民としての實質を發揮しつゝあることは周知の事實で

ある。そしてこれは、將來に於て益々必要の度を加へるのである。而も其の内容に於ては、在來と趣を異にするものでなくてはならない。即ち、何處までも大國民的公民たる資格を具備しなくてはならない。そしてこのためには女子の公民教育は男子のそれよりも一層大きな改造を要するのである。

但し、この點について注意を要するのは、女子の公民教育には兎角弊害が伴ひがちなことである。殊に、日本の女子は家庭の主婦たることを最高使命とするばかりか、これに適するものであるが、社會的活動に偏する時には、この長所美點を損傷しがちであることは、事變下の女子の活動に徴しても明かなことである。併しながら、女子が家庭の主婦としても、經濟を始め、公民生活との關係が極めて密接であるのに加へ、海外に進出したり外國と交際したりする女子が益々多きを加へることが明かであるかぎり、女子の公民教育を重視すると共に、其の實體も時勢の進歩に即應するやうに改善すべきは當然のことである。

これと共に必要なのは、公民教育の普及と其の實生活化である。即ち、公民教育を全國民に普及すると共に、單なる知育に止らず、これを實生活に具現せしめるやうにしなければならない。而も公民教育の普及は極めて困難なことに屬する。日本の發展に伴ひ異民族包擁の度が益々増大するからである。

併しながら、飛躍期日本に於ける公民教育の中心點は、其の創造性の重視に存しなくてはならない。飛躍期日本の最高使命は新東洋文化の創造に存するからである。斯くして公民生活に於ても、單に在來の因習を套襲したり外國を模倣したりするに止らず、進んで、世界の範とするに足る理想的な公民生活又は眞實十分な意味に於ける公民生活即ち世の所謂「皇民生活」の創造を標的とするものでなくてはならない。そしてそのためには、何よりも先づ公民教育又は公民生活に對する徹底的な研究が必要である。

第二節 教育と政治

最近の我が教育界に於ける一注目事は、教育と政治との接近である。政治的教育學の擡頭といひ教育上の新體制といひ、將た教育に依る大政翼賛運動といひ、何れか其の證據でないものがあらう。そしてこの現象は、勿論、慶賀すべきものではあるが、而も戒心を要する點が必ずしも皆無ではない。少くとも、この傾向が極端に走る時には、教育の本領が脅かされる虞があるからである。

思ふに、教育も政治も等しく生活の一部分であり、随つて實質的には相互に參差交錯してゐるかぎり、其の關係を一義的に決定することは困難であるが、兩者の間に相違が存し、おのづから、兩者を同一視することが誤であることだけは、疑を容れる餘地がない。而も、世には、兩者を全く相反するもの又は甚だしく異なるものと見るものも少なくないことを忘れてはならない。事實、最近に至り、教育と政治とを接近させようとする傾向が現れたのは其の證據ではないか。斯くして、問題の中心は、「教育と政治との異同及び關係如何」といふこととなるのである。そして、一般的抽象的に見れば、教育も政治も、文化の方途的方面に位する點に於ては其の揆を一にするが、教育は、全體的・根本的間接的方途であるのに對し、政治は、部分的即効的直接的方途であるところに、其の差異が存する。

但し、教育も政治も文化の一部分であるといふことに關して註解を要するところがある。それは政治と文化との關係についてである。最近、「文化」といふ語が甚だしく亂用されつゝあるが、最も多く用ゐられるのは、「政治・經濟及び文化」といふ風に、政治を文化以外と見る狹義の使用法であり、且大政翼賛會に政治部と文化部とが別立してゐるのは、其の代表である。然らば、この場合即ち政治や經濟等と別立する狹義の文化とは抑も何を意味するであらうか。これにも見解の相違があ

る。そして、廣義の文學藝術を主として學術を包含しないものと、文藝と學術とを包含するものが其の主要なものである。而も、前者に於ても、高級なもの又は平和的乃至廣義に教育的なもののみを文化と呼ぶ場合があることは、ラジオの「文化演藝」といふ語等に徴して明かである。そして私から見れば、文化を狹義に解することは妥當でないといはなくてはならない。即ち、文化は、自然及び人格と對立する。人生の客觀的・普遍的・實質的・成果的の一面で、學問藝術は勿論、道德・宗教より政治・經濟乃至軍事警察までも包含するものと解するのが最も妥當である。随つて、文化部とか文化事業とか文化生活とか文化映畫とかいふやうな語は排斥されなくてはならない。私が教育及び政治を等しく文化の方途的方面と見るのも、畢竟、これがために他ならない。然らば、文化の方途的方面としての教育と政治とは、嚴密には、如何なる異同又は關係を有するであらうか。

二

反説するやうに、教育も政治も、等しく文化的現象、詳しくは、人間的・自覺的・價值的・創造的・文化的（歴史—社會的・國家的）現象であると共に、行的・方途的現象であり、且學術や藝術よりも道德に近似する點に於て其の揆を一にする。即ち、兩者は、實行本位の現象であり、自治と協力とを動力としながら、道德に比べると、人生の目的を達成する方途に傾き、随つて、人生の具體

普遍的方面即ち時空的—歴史的・地理的制約を受ける度合の強いものである。併しながら、教育と政治とは、左記の諸點に於て趣を異にする。

先づ、教育は、間接方途的現象であるのに對し、政治は、直接方途的現象である。即ち、教育は一面から見れば、人格の創造を直接目的とし、隨つて人生の前段たる修養の一種即ち幫助的修養であり、自ら未成熟者と成熟者との交渉であり、且幫助又は愛と敬とを一主要特色とするものであり、他面から見れば、舊文化を傳達し改造することを直接目的とし、新文化を創造することを間接目的とするに對し、政治は、一面から見れば、文化創造を直接目的とし、隨つて人生の後段たる活動の一種であり、おのづから所謂成熟者間の協力的現象又は力的現象であり、他面から見れば、現代文化社會の統制を主眼とするものである。次に、教育も政治も、文化全體に對する方途的現象で、凡そ如何なる文化現象と雖も、教育及び政治に關係しないものはないが、只教育には、將來的・永遠的・理想的特色が顯著であるのに對し、政治には、現在の・即効的・現實的特色が明白である點に於て、兩者の間には没すべからざる相違が存する。

更に、教育も政治も、等しく社會的現象ではあるが、教育は、何處までも、一人の教育者と一人の被教育者との人格的・道德的（敬愛的・協力的）・公正的・將成的交渉を中心とする社會的現象であるのに對し、政治は、寧ろ社會と社會又は個人と社會との功利的・外的・力（權威）的・現在的交渉を中心とする社會的現象である。

この他、教育は、國家的であると共に超國家的であるのに對し、政治は、寧ろ偏に國家的又は對國家的である。

最後に、教育と政治との時間的關係について見るに、教育は、本來、政治に先立つべきものであり、事實先立つてゐるが、一度政治が開始され、一度國家が成立すれば、政治は常に教育に先立つのを習とし、隨つて教育は政治の原動力たるべき使命を果すことが出來なくなるのである。

三

以上は、教育と政治との異同又は關係の一般的抽象的考察であるが、我が國の如く、本來政教一致を以て國是とし、且政治の基調が家族的即ち道德的な國に於ては、教育と政治とは極めて密接な關係を有するものである。然るに、在來は、この點に關する自覺が稀薄であつたがために、兎もすれば、兩者は互に扞格矛盾しがちであつたのは、洵に遺憾なことといはなくてはならない。隨つて今や、あらゆる方面に亘り、國家的國民的自覺が高まるに連れ、上記我が國の政治の獨自性及びそれと教育との關係が密接であることが理解されるに至り、教育の政治化が力説されつつあるのは、

當然なことである。

但し、前述の如く、教育は本來政治の原動力を涵養することを使命とするものであるかぎり、教育の政治化が必要且有効な場合は、只教育が政治に劣つてゐるか又は政治の基調が眞に教育的になつてゐる時にのみ限られることを忘れてはならない。然るに、在來の我が國の教育と政治とは必ずしも斯くの如き状態にあつたと斷言する事は出来ない。否、端的にいへば、寧ろ政治に缺點が多かつたとしてなくてはならないのは、政治教育や公民教育の必要が力説されると共に、未成年者や教育者を出来るだけ政治に近づけないやうにしたことに徴して明かである。幸にして、最近では、政治家の自覺に伴ひ政治の淨化高上が始まつつあるが、而もこれは只漸く緒に就いただけに過ぎない點に於て、未だ安んじて「教育の政治化」に委ねることが出来ない。斯くして今日最も必要なのは、政治其のものの十分な淨化高上である。そして茲に、政治に於ける新體制運動と教育に於ける大政翼賛運動との意義が存する。即ち、教育に於ける大政翼賛運動は、何よりも先づ政治上の新體制を道德化—教育化することではなくてはならない。政治上の新體制が道德化教育化されなければ、これに未成年者を参加させることは危険至極だからである。然るに、世にはこの點を理解しないで、學生を直ちに政治に参加させようとするものもないではないが、少くとも早計の非難は免れないであらう。そしてこの點から見れば、現代日本の教育は政治に對して二重の責を負ふものといはなくてはならない。即ち、一方、政治上の新體制を道德化教育化すると共に、他方、青少年に健全な政治教育を行ふことである。それがためには、教育者は、何よりも先づ日本政治の眞髓を理解することが必要である。凡そ模倣には害が伴ふのが常であるが、政治上の模倣には特に大なる害毒が伴生することを忘れてはならない。随つて、新體制は何處までも創造的ではなくてはならない。而も眞に價値ある創造は一朝にして可能なものではないから、新體制の樹立を念とするものも、決して拙速主義に墮することなく、何處までもこれを百年の大計として堅實な歩武を進めるやうにしなくてはならない。そして茲に、國民教育の改造が重要な意義を有する所以が存する。

四

幸にして、國民學校令はこの點に關して相當の考慮を拂ひ、「皇民の基礎的鍊成」を國民學校の使命としてゐるが故に、國民學校の教育を受けたものが將來大政翼賛の當事者となる際には、教育と政治との健全な提携を見ることが出来ることと信ずる。随つて今日當面の問題となるのは、斯くの如き基礎的鍊成の階段を経てゐない青少年の政治化である。そして茲に、學生生徒及び、それ以外の青少年の政治教育が重要性を帯びる所以が横たはつてゐる。日本現代の教育も亦多事なりといは

ざるを得ない。それにしても憂慮に堪へないのは、教育者の實力の貧弱である。私が、教育者養成問題を教育界、否國家焦眉の急務とするのは、必ずしも不當ではないであらう。

第三節 新體制と公民教育の指標

一

今やそして遂に我が國にも「創造の世紀」が來た。小は代用食の工夫から大は新東亞の建設に至るまで、一として創造的精神の現れでないものはない。この中で國民の生活にとつて最も重大なものは「新體制の確立」である。これは國民生活の基礎たる政治上の大改造であるばかりでなく全國民に關係のある問題だからである。

由來、我が國に於ては、政治上の問題は、遺憾ながら一般國民の生活から遊離しがちであつた。そしてこれは、ひとり我が國の政治生活が發達しなかつたばかりでなく一つは公民教育が普及徹底しなかつたためである。然るに、新體制は、其の具體相は未だ明白とはなつてゐないが、少くとも在來に比して、政治が多くの國民に一層直接緊密な關係を有するやうになつてゐるのではないかと思はれる。幸、私のこの豫想にして誤がないならば、これはひとり政治上の大問題であるばかりでな

く、又教育殊に公民教育上の重要問題である。新體制は全國民の協力に俟つことなしには其の實現が不可能であると共に、新體制其のものは、實は將來發達さすべきものであり、隨つて將來の國民―青少年の力に俟つべきものだからである。昨今、「新體制と學生」又は「新體制と教育」といふことが心ある人々の眞摯な注意を惹きつつあるのも、蓋しこれがために他ならない。

併しながら、私は、學生を政治又は政治運動に直接參與させることには輕々しく賛成することが出來ない。本來、一般の學生又は青年は、政治に對して理解を持たないのは勿論、興味も淺いものである。隨つて、學生や青年は、何よりも先づ政治に對する正しき理解に伴ふ深い關心を持たしめるやうに教育さるべきものである。勿論、學生や青年の一部には、政治に關して相當の理解を持つものや深い關心を懷いてゐるものすら決して少くはないが、兎もすれば、斯くの如き學生や青年は、其の思想は勿論、行動に於てだに極端に走りがちであり、隨つて、老成人との折合が悪く、建設協調より破壊反抗に墮するのを習とするのは周知の事實である。斯くして、例へば明治維新の如き文字通りに更始一新の時代で、老成人が只邪魔者であるに過ぎないといふやうな時代に於てならば、青年や學生が政治の衝に當るのは差支ないが、今日の時代は、或る意味では明治維新にも優る革新時代であるにも係らず、而も、革新の必要を痛感してゐるのは、ひとり青年や學生のみでなく、少くと

も政治に關するかぎり、老成人と青年との見解の隔りがそれ程大きくないばかりか、今次の新體制運動は、萬民輔翼の國民觀念を基調とするものであるかぎり、學生や青年を主とすべきものではない。況んや、一般青年は兎に角、今日の學生青年はさなきだに思想が動搖して其の本分たる研學が妨害されつゝあるに於てをや。私は、今日に於ても、少くとも學生青年は實際政治に直接關與させず先づ教育により、政治に關する正しき理解と關心を持たしめ、やがて學窓を出た際に其の實力を十分に活用させるやうにするのが最も正しき方途であると考へるのである。斯くして、青年の政治教育の使命は將來益々大となり、おのづから公民教育は高等教育に於ても一層重要視されるべきこととなるのである。

尙この點に聯關して一言すべきは、政治教育の公民教育に於ける地位である。

二

在來の公民教育は、いふまでもなく、法律と經濟とを主としてゐたのは「法制經濟」科の舊名の立證するところである。然るに、將來は、右の理由に依り、少くとも青年の又は高等教育に於ける公民教育は、政治に重きを置かざるを得ないこととなるのである。斯くして、「政治化」は將來に於ける公民教育の一指標とならざるを得ないのである。尤も、新體制に於ける政治尊重は、一方に於

て經濟至上主義に反すると共に、他方に於て道德主義であることを忘れてはならない。随つて「道德中心の政治化」こそ、正しく新體制下に於ける公民教育の指標でなくてはならない。そして、新體制が日本獨得の政治體制であるかぎり、本來「政教一致」を以て一大特質とする我が國の公民教育の指標が「道德中心の政治化」であることには、何等の不思議もないではないか。併しながら、一言に「政治化」又は「政治中心」といつても、其の内容を詳述しないかぎり、其の本旨は未だ闡明されたといふことが出来ない。

思ふに、國民統一の原理には種々あるが、政治に關する限りに於ては、狹義の政治本位と經濟本位とが其の代表的なものである。そして後者はいふまでもなく社會主義又はマルクス主義の採るものであるが、日本に於ける新體制の統一原理とすべからざることは説明を要しないであらう。尤も政治に依る統一にも亦種々あり、且民主主義と非民主主義とが其の代表的なものであることは世の殆く知るところである。そして、新體制が民主主義多數決主義又は平等主義即ち一言に數量主義的個人主義を排することも亦明白である。斯くして、新體制の統一原理は、上御一人の叡慮にかなひ一億國民の信頼に價する、眞に卓拔優秀な人格に依る統一でなくてはならない。この點から見れば、多年の尊い歴史と複雑な機構とを有する政黨全部が自發的に解消して、この體制の確立に協力しよ

うとすることは、眞に悲壯なことで、單に政治上の常套的策略と見るべからざる重大なる道德的乃至哲學的意義を有することを見逃してはならない。これは、實は、政治觀の革新以上、道德觀乃至人生觀の改造だからである。新體制の本旨が、教養乏しき一般國民や政治家に容易く了解されないのも、一つはこれがために他ならない。

尙この點に關して注意すべきは、新體制の思想的基礎又は指導原理を簡單に全體主義とし、且これを獨逸のそれと同一視することは輕率であるばかりか危険であるといふことである。いふまでもなく、我が國は獨逸とは其の國體を異にするからである。随つて私は、新體制の統一原理を「指導者原理」と呼ぶことには容易に賛成し得ないものである。新體制は、何處までも國體の本義に基づき一切を擧げて 天皇に歸一し奉ることを基調とするものであるかぎり、其の最高責任者は國民の指導者としてのみではなくて翼賛者としても第一人者でなくてはならないからである。そして其の何れを問はず、最高責任者は、文字通に國民の代表者である點に於て、本來の意味の政治家としてのみではなく、人格的―道德的にも卓越した人でなくてはならない。斯くしてこそ、新體制は、國民の純眞な愛國心又は國民意識に基づく熱烈な支持と協力とを俟つことが出来るからである。そしてこれは、在來の心ある國民が政治から離反したのは、少くとも一つは政治家の人格に對する反感の

致すところであつたことに想到すれば、蓋し思半に過ぎるであらう。

斯くして、一般政治家も、新體制に參與せんとするかぎり思想的道德的人格の革新を必須の先決問題としなくてはならない。新體制が國體の本義に基づき、公益優先を基本原則とし、職域奉公を旨とし、更に、日本固有の大家族主義に則る強力政治にして、而も親密な一元的組織により、遺憾なく國民の總力を發揮せんとするものであるかぎり、道德的に低劣なものは政治に參與する資格を缺くこととなり、且プラトンが其の「國家篇」に於て論じてゐるやうに、五十歳ともなり、あらゆる修養を積んだものが奉仕と謙遜とを以てのみ始めて政治に參與し得ることとなり、「政治家」は職業的ではなくて、文字通國民の「選良」又は國民の「儀表」となるやうになるのである。これ、「公民教育の道德化」を以て將來に於ける公民教育の一指標とする所以である。

三

公民科の直接使命は、勿論、所謂「政治家」の養成にあるのではなくて、國民―公民の養成にあるが、上述の如く新體制は萬民輔翼を旨とするものであるかぎり、將來は國民と政治との關係が一層親密になるばかりか、前述の如く直接政治に參與するものゝ道德的資格が一層重大視されるやうになるが故に、公民教育に於ても、知育に傾くことがなく、公民的知識の實踐又は「公民」其のもの

養成に力を致すと共に、公民科を單なる知的公民科として取扱はないで、これを所謂國民科の一部、即ち修身科と統合するやうにしないでならぬ。勿論、これは在來の公民教育に於ても強調せられ又心ある教育者によつて實行されてゐたことではあるが、將來は新らしき理會の上に、即ち眞にすぐれた政治的性能を具へた日本人を養成することを旨として一層重視さるべきである。そしてこの指標をして眞に有效な結果を收めしめるには、何よりも先づ、公民科擔任の教育者が自己の思想と人格とを道德化するやうにしないでならぬ。

四

最後に老婆心までに一言して置きたいのは、新體制は未だ十分に確立されてはゐないのであるから上記の論議には多分に私の推測に依る一家見が混入してをり、たとひ、幸にして私の推測する如き新體制が確立されたとしても、それで能事が終つたのではなくて、これを育成し活用してこそ始めて其の價値が發揮されるものであり、且それは相當長期に亘る國民全體の協同責任であるが故に、今日公民科教育の任に當る教育者は、これに對する準備教育に力を致して欲しいといふことである。これと共に、新體制が今日傳へられるが如く確立されれば、在來の公民教育で取扱つた問題の中で不用になつたり或は新しい解釋を要したりするものも少くないから、これらの問題についても豫

め研究を積んで置くことが必要である。其中特に重大なものは、議會・選舉・政黨である。但し、これらは何處までも準備的研究であつて、未だ新體制が完成しない今日、さなきだに思想の動搖し易い青少年に對して、半可通を振り廻したり極端な批判或は非難の言を弄したりすることは、斷じて避けなくてはならない。ひとり、新體制ばかりでなく、日本全體の發展は主として青少年の力に俟つ今日に於て、彼等の心を徒に動搖させることは、彼等自身ばかりでなく日本全體の損失だからである。殊に政治上の問題は實行と密接な關係を有する點に於て、其の取扱は慎重を加ふべきである。就中、今日、地方政界等に於ては、新體制の本旨を誤解するため、或は一身上の利害得失から種々の論議や見解が行はれてゐるのであるから、公民科擔任の教育者は、特に、其の態度を厳正にし其の用意を周到にして、指導者としての自己の使命を十分に遂果して欲しいものである。

第四節 公民的鍊成

一

非常時は教育にも種々の影響を及ぼしたが、「鍊成」を主要原理たらしめたことも亦其の顯著なもの一つである。鐵は鍛へられて強くなり、松は風雪に逢つて緑を増すやうに、人間も鍊られて始

めて「もの」に成るのである。殊に、これは其の精神的方面に於てさうである。勿論、身體にも鍛錬が必要であるが、本來虚弱なものや病氣に罹つてゐるものや、幼少又は老齡のものの身體は鍛錬よりも却つて保養治療等が必要である。然るに、精神の鍛錬は、極端な場合を除いては、何人にも又如何なる時期にも必要であり有效である。況んや、身體の鍛錬は、精神の鍛錬を必須の條件とするに於ては、精神の鍛錬はやがてあらゆる鍛錬の動力又は基礎となるものであるといはなくてはならない。「知行合一」が「錬成」と共に教育の新原理となりつつあるのは、洵に當然のことである。事實、知は鍛錬してのみ行となるのである。極言すれば、精神の鍛錬とは知を行化すること、即ち知識を生命化して活知活識たらしめることである。そして、在來の教育の一缺點が、知育に偏することであるといふ非難の眞意も、知の鍛錬が忽にされたことに存するかぎり、精神的鍛錬は將來益々重視されなくてはならない。而もこれは、勿論、理知の方面のみに限らるべきではなくて、情意の方面をも含むのである。實に、知を知として鍛錬すると共に、知を情意と結合し且これを身體を通して行たらしめることが、やがて錬成教育の實質でなくてはならない。そしてこの點から見れば私は、「公民的錬成」の必要と價值とを力説せざるを得ないものである。

二

最近、公民教育が長足の進歩を遂げたことは洵に慶賀に堪へない。而もこれは、ひとり男子や特別の公民教育を受けたものばかりではなく、女子にも亦一般國民にも普及してゐるのは特に喜ばしいことである。但し、これは知育としての公民教育であつて、行育としての公民教育でないのは遺憾である。そしてこの點から見れば、公民教育は、未だ舊來の法制經濟科に伴ふ通弊を脱却してゐないのである。即ち、公民的知識はかなり普及したが、これを實行化する點に於て缺けるところが少くないのである。實行と離れた知識に諸多の弊害や危険性が伴ふのは一般のことであるが、公民的知識に於ては特に甚だしく、時としては無知よりも却つて有害な結果を生ずることさへ少くないのである。公民教育の發達が其の實行的方面を重視することと併行してゐるのも、蓋し、この間の消息を物語るものといはなくてはならない。多年慣用の法制經濟科の名稱を廢して、公民科と改稱したのも、公民科を廣義の修身科と見るのも、等しく皆このためである。然るに、偏知輕行的公民教育の弊害は、遺憾ながら今日に於ても未だ十分に救治されてはゐないのである。そしてこれは、勿論、諸多の原因があるが、一般公民の惡模範も亦少くとも其の一主要原因であることは否むべくもなからず。

思ふに、日支事變は、公民的錬成の絶好機會である。兵役納税の大義務を始め、日本人が國家公

民としての價値を發揮すべき機會は、あらゆる方面に充溢してゐる。然るに、實際は必ずしもこの機會を活用してゐるとは限らないばかりか、兎もすれば、公民的知識が悪用されがちであるのは、頻發する諸事象の明證するところではないか。殊に甚だしいのは、入營出征等の嚴肅な事實を悪用するものさへ決して皆無でないことである。商業や經濟方面等に非公民的事件の多いのは、「聞取引」等の語が流行してゐることに徴しても明かである。この他、流言造語の横行、機密の漏洩、公務の懈怠に基づく不祥事の續出、奢侈浪費等の反國策的行爲、官吏の獨善的態度等、何れも公民教育の不徹底を物語るものである。尤もこれらは單に一般公民の間にのみ現れる事象ではなくて、重大な會議等に於てさへも亦絶無でないのは、私の最も遺憾とするところである。事實、「事變下の某々會議」と聞くだけに嚴肅な感じを覺えるのに、其の内容は必ずしも全國民の期待に添はないのは、世人周知のところである。例へば、質問の順序を變更するために時間を空費したり、開會時間が數時間遅れたりするが如き、即ち其の一例である。これらが、見學の學生生徒等を始め、國民一般に如何なる影響を與へるかを想察すると、決して等閑視することが出來ない。況んや、失言問題の如きは、公民教育上極めて重要な意義を有するものである。

三

併しながら、これよりも一層近接且重要な問題は、教育者の言動である。たとひ一般社會の情態が公民教育を害する場合でも、教育者にして躬を以て率ゐるならば、公民教育の効果を擧げることには、必ずしも困難ではないのである。然るに、實際が、私のこの信念に反するのは遺憾である。たとへば、目下重大な社會問題となつてゐる中等學校の入學試験でも、教育者に全責任を負はすべきであるにも係らず、當局が監督官を試験各地に派遣するが如きは、教育者の信用を失墜する所以、少くとも自治力の不足を曝露する所以であることを忘れてはならない。教育者が、準備教育を行つたり轉職したりしたために處罰を受けることの悪影響に就いては、説明を要しないであらう。入學試験が終るや否や、教育者が直ちに賛否の意見を發表するが如きも、少くとも輕率の誹は免れないであらう。この他、教育者が公私の別を紊るやうな言動を敢てしたり、其の本職を忽にしたり、教育者の各種の會合等に非公民的要素が多かつたりするが如きも、不知不識の間に公民教育に悪影響を及ぼす所以である。そしてこれらは、決して公民的知識が不足なためではなくて、寧ろこれを實行化する上に缺けるところがあるためである。私が「公民的鍊成」の必要を力説するのも正にこれがために他ならない。然らば、如何にすれば、謂ふ所の公民的鍊成が可能であらうか。

反説する如く、鍊成は行的鍛鍊である。然るに、行的鍛鍊は習慣に俟つのである。而も公民的生

活は文字通の社會生活であるかぎり、公民的鍊成も亦集團の力を藉りなくてはならない。幸にして最近、集團的行動の機會は次第に増加しつつあるが故に、指導者はこれらの機會を利用するやうにしないでならない。然るに、社會の實狀を見るに、この重要な機會さへ無爲に逸去されがちなのは、洵に遺憾なことである。そして、これは主として集團の指導者又は幹部に適任者を得ないためである。而もこれが婦人の方面に於て特にさうであるのは、所謂「隣組」や各種の婦人會等の實情に徴して明かである。併しながら、これはひとり集團の指導者や幹部のみを非難すべきではなくて、適任者でありながら、一舉手一投足の勞を惜んでゐるばかりでなく、徒らにこれらの人達を非難してゐる人達も、又、この状態を傍觀する一般國民も、等しく其の責を負ふべきである。即ち、公民的鍊成に於ても亦舉國一致でなくてはならない。而もこれが極めて困難なことは、精神總動員運動などの實情が示唆するところである。斯くして、時局は公民教育當事者の發奮に俟つ他がなくなるのである。即ち、單なる公民教授者又は單なる學校に於ける公民教育者を以て安んずることなく、實行的にして國民的な公民教育者たることが必要である。そしてこれは、今日こそ洵に絶好の機會である。今日は、ひとり國民の結束が緊張してゐるばかりでなく、前述の如く、國民が公民として活動すべき分野も機會も極めて多大だからである。

併しながら、公民生活はやがて道德生活であるかぎり、公民的鍊成も亦道德的鍊成と相伴ふことなくしては其の眞効果を擧げることが出来ない。そしてこの點から見ると、私は最近の我が國狀に對して憂如たることが出来ない。國民の道德的意識が、一面に偏傾してゐるばかりでなく、物質的生活の壓迫等のために緊張と透明とを缺くものも少なくないからである。随つて、公民的鍊成は決して容易なことでないことを忘れてはならない。庶幾くば、所謂二十七世紀の第一年が、これらの缺陷を匡救して、國民の公民的並に道德的鍊成が徹底的境地に到達することの出来る年でありたいものである。

四

以上の見地から見れば、前回斷行された中等學校公民科教授要目の改正は有意義なことである。公民科は制定以來比較的日が浅く、自ら改正の度數も少いのに、公民科の意義と價值とが益々高まるばかりでなく、公民生活其のものゝ變化が著しいために、舊來の教授要目を以てしては到底其の目的乃至使命を果すことが出来ない。況んや、公民科は其の教科の性質上、被教育者の生活とは勿論、廣く國家及び社會との關係が近密であり、随つて教授要目の良否の及ぼす影響は切實多大であるに於てをや。

右の改正に於て、私が何よりも欣ばしく思ふのは、修身科との關係が一層明白緊密になつたことである。而も修身科・公民科・教育科の三位一體を理想とする私は、右の改正を以て未だ完璧とすることは出来ない。殊にこれが女學校に於てさうである。併しながら、公民科と修身科との關係が明白緊密の度を増したことは確に喜ぶべきことである。殊にこれは、法律及び政治就中經濟と道德との密接な關係、即ち法律・政治及び經濟は廣義の道德であることを忘れてこれらに直接關與するものが反道德的であることを意としない在來の我が國民生活に想到する時に、私は一層多くの欣びを感じるものである。實際、今日の我が國にとつて極めて重要なことの一つは、國民生活の道德化にあるが、殊にそれが政治生活及び經濟生活の方面に於て切實であることは、心ある國民の普く認知するところである。そしてこの點から見て私の常に遺憾としてゐることは、道德的缺陷の明白なものが平然として政治に關與してゐることである。而もこれは、寧ろこれらの人々をして然かあることを許す國民の道德心の低弱の罪である。随つて、將來の公民科は特にこの點に留意し今回の改正の趣旨を十分に徹底させることによつて次代の國民の道德心を高め、以て政治生活及び經濟生活の淨化―道德化を圖るやうにしなければならぬ。

第二に、公民科の教授方針が闡明され、而もそれが大體に於て肯綮に中つてゐるのは喜ばしいことである。そして其の方針の中心點は、いふまでもなく、「日本臣民たる信念と憲政治下の國民たるの資質とを養成することを要す」といふことである。

但し、これは、見様によつては非難の餘地がないでもない。勿論、これは舊教授要旨が單に「善良なる立憲政治の民たるの素地を育成するを以て要旨とす」としてゐるのに比べてはたしかに一段の進歩である。併しながら「日本臣民たるの信念」と「憲政治下の國民たるの資質」とを並列又は對置したのは、少くとも戒心を要することである。蓋し、今日の日本に於ては、「憲政治下の國民たるの資質」を具へることなくしては、眞に充實した日本臣民たるの信念を養成することが出来ず、其の逆も亦同様だからである。随つて私は、寧ろ「憲政治下の日本國民たるの信念と資質とを養成する」ことを本科の要旨としたいのである。

これに次いで「我が國民の政治生活經濟生活及社會生活に關する事項を會得せしめ」ることを公民科の一重要使命としてゐるのは、大體に於て正しいが、而も、政治生活經濟生活と社會生活とを並列的又は對立的に取扱つてゐるのは缺點である。政治生活及び經濟生活は、社會生活以外のものではなくて、社會生活の内容であると共に、社會生活の内容が政治生活及び經濟生活のみに盡きるものではないからである。而も、公民科の本旨が憲政治下の日本國民たる資質の養成に存するかぎ

り、上記の教授方針は、政治生活經濟生活以外法律生活をも加へて、「公民科に於ては我が國民の政治生活經濟生活法律生活等の社會生活に關する事項」と訂正さるべきである。況んや、本科には、嘗て「法制經濟科」といふ名稱が附されてゐたばかりでなく、今回の改正要旨に於ても、「國憲の本義」を知らしむべきことや「遵法の念」を涵養すべきことを力説してゐると共に、所謂憲政治下の日本に於ける社會生活即ち政治生活經濟生活等の大部分が法律生活であるに於てをや。事實、上記政治生活經濟生活の道德化は、法律生活の道德化に他ならないのである。

但し、教授方針の示すところに従へば、「社會生活」と稱するものは實に「道德生活」の義であることは、「我が國固有の醇風美俗を尙び、協同生活の訓練を重んじ以て公民的德操を養ひ大國民たるの資質を育成するに力むべし、」としてゐることに徴して明かである。而も、所謂社會生活が道德生活を意味するならば、尙更これを政治生活經濟生活と並列させることが危険である。随つて、私から見れば、この項目は、第二項即ち政治生活及び經濟生活の前に置かれるのが最も妥當である。

第三に喜ぶべきは、國民精神又は日本精神の高揚であるが、本來過般の改正が國體明徴を直接原因とするものであるかぎり、これは敢て特筆する必要があるまい。寧ろ問題は、日本精神過重の弊がないかどうかといふことに存する。教授要目には、文化・海外發展・國交・我が國の使命等の項

目が收められてゐる點から見れば、これは單なる杞憂に止るやうであるが、而も、舊要目中より「人類文化の發達」の一項が減削されたのに加へ、教授方針中には、この點に關して「大國民」といふ文字以外には何等力説するところがないのである。勿論、論者の説の如く、「人類文化の發達」といふ語は、一面から見れば生物學的用語であり、且内容不明な用語でもあるが、而も現に「人類學」といふ語が存するばかりでなく、文化には超國家的超民族的國際的方面が存在することは否み難き事實であり、且如何なる國民も其の文化が超國家的超民族的國際的内容を豊かに具備してのみ、始めて所謂「大國民」となり得ると共に、將來の日本人は大國民たることを目指して教育さるべきものであるかぎり、語の不完全を以て直ちに其の内容を捨てるのは必ずしも稱すべきことではない。但し、在來の公民科否在來の我が國の教育は、明確な國家的民族的自覺なくして徒に「人類」といふやうな語を用ひてゐたのは、勿論、難ぜらるべきである。随つて、將來は、明確な國家的民族的自覺の上に必要な超國家的超民族的方面を正當に評價するやうにすべきである。そしてこの點から見れば、「人類文化」に代ふるに「世界文化」又は「國際文化」といふやうな語を以てすることが妥當であると共に、實際教授に當る場合にはこの點に注意し、極端な國民主義に走る結果、大國民の育成としての本科の要旨に反するやうなことがないやうにして欲しいものである。

第四に喜ぶべきことは、教材の選擇排列が略々宜しきを得たことである。殊に、要目の數を少くして其の活用と統合との可能性を大にした點は稱すべきである。前學年が法制、後學年が經濟を中心としたことは、尙研究の餘地があると思ふが、今日に於てはこの他には名案がないであらう。問題は、本科の教授を「我が國」から始める方がよいか、「我が家」から始める方がよいかといふことである。そして私から見れば、後者が優つてゐる。「我が家」から始める時には、公民科を狹義の公民即ち成人のみに必要な教材であると誤解させることがないばかりか、一君萬民・忠孝一本乃至大家族主義を以て本質とする日本の特色を理解させる上に好都合であると共に、私生活と公生活、家族と國家乃至道德生活と政治生活・經濟生活及び法律生活との關係を容易く會得せしめることが出來、更に、次項に「我が郷土」を説き、第三項に「我が國」を説く時には、第四項の「我が國體」との連絡をも有效容易ならしめることが出来るからである。

斯くいへば、世には、恐らく、「我が家」より始めると、國家尊重の念を稀薄ならしめる處があると難ずるものもあるであらうが、これは斷じて杞憂である。今日の生活は、現に小學校及び中等學校に於て國家尊重の基礎乃至國民精神の源泉は或る程度まで涵養されてゐるばかりでなく、公民科の如く、兎もすれば、生徒をして難解又は無味乾燥の教科の如く誤解させがちな教科に於ては、教

材の排列には心理的原理が重要視されるべきものであり、更に後學年の劈頭は「國民生活」であると共に、其の最後は「我が國の使命」となつてゐるからである。但し、私は、後學年の最後を「我が國の使命」とすることには、不足を感じてゐるものである。即ち、私は、寧ろこれを「我が國及び我が國民の使命」とした方がよいと思ふものである。「我が國の使命」だけでは、生徒をして實際に於てはそれが自己即ち我が國民の使命であることを痛感させることが困難だからである。

第五に喜ばしいのは、教授の要旨にも、教材にも高義の文化的要素が相當に加味されたことである。思ふに、教育は其の本質に於て文化的現象であるかぎり、如何なる教育に於ても文化を輕んずるものではなく、事實又文化を輕んじ得るものではないが、在來の公民科は、文化中知的形式的目的的方面を過重したことは否み難き事實である。然るに、幸にして、今回の改正に於ては、特に「國民文化」の項目によつて文化一般に關する理解を持たしめることに力を注いでゐるばかりでなく、本來獨自の文化國即ち主情意的文化國たる我が國の本質の闡明を基調とする結果、全科に亘り、生活の情意的方面が重視されることとなり、自ら本科に深味と潤ひとを與へ、實際教授に於ても興味を伴ふ可能性が多くなつたのである。そしてこれは、畢竟するに、公民科の道德化に他ならない。但し、これは、本科の教授を一層困難ならしめる所以であることを忘れてはならない。別言すれ

ば、公民科擔任者の責任を大にし、随つて其の教養の更改を要請する所以であることを忘れてはならない。實際、「法は人なり」で、たとひ、教授要目が如何程理想的に改正されても、教授者にしてこれを十分に活用する實力を持つてゐなければ、結局、形式的改正に終る他はないのである。私はこの點から見て、過般の公民科教授要目の改正を喜ぶと共に、該科擔任の教育者諸君が、自己の使命を自覺し、且其の遂果のために倍層の修養を積まれんことを要望して止まないものである。

五

尙、近時に於ける公民教育の動向について所感を述べることにする。先づ、國民精神の總動員について見るに、これは、一面から見れば、國民の公民的自覺の普及と徹底とによつてのみ、始めて其の十分な効果を収めることが出来るものである。思ふに、國民精神總動員の一大特色は、狹義の精神運動ではなくて、廣義の精神運動即ち生活の全野に亘る改善運動であると共に、國家的自覺を動力とするところに存する。そしてこの特色を有する國民精神の總動員が、今日行はれつゝあることは、洵に時宜を得たものと評せざるを得ない。單にそれが事變のために必要に迫られてゐるばかりではなくて、近時に於ける國民精神の傾向から見ても同様であり、若しもこの儘に放任する時は、將來由々しき結果となるからである。そして近時に於ける國民精神の惡傾向とは、利己的享樂

的悲觀的傾向を意味する。實際、最近に於ける我が國民には、國家的國民的自覺の稀薄なものが次第に増加しつゝあつた。然るに支那事變は、幸にこの病弊を一掃して、全國民の精神に愛國の情熱を湧き立たしめた。併しながら、今後は、和戰何れの場合に於ても、一般國民が愛國の實を擧げるには、公民的精神の高揚と公民的知識の充實とを要するのである。事實、如何程政府當局が國民精神の總動員を叫んでも、國民にして國家や世界の情勢に關する透徹した理解を缺く時には、これに對應することが出来ないのである。これを具體的にいへば、特別税の納附・愛國公債の購入・國産品の愛用・軍需品原料の節約等も、明白な公民的知識を俟つことなしには徹底することが出来ないものである。随つて將來は、益々公民教育の普及と徹底とに努めなくてはならない。これは、事變其のものの理解についても同様である。例へば、事變と戦争との別や宣戰布告の意義等を始め、事變を正しく理解するにも公民的知識が必要なのである。

公民的知識の必要は、全國民に對してであるが、それが特に女性に對してさうである。由來、我が國の婦人の特色は私的のところ存する。然るに、事變以來、否應なしに、婦人の心を國家的方面に向けしめるやうになつた。これは直接事變に關係のある方面、即ち、應召軍人の家族の取るべき行動とか、出征軍人の歡送とか、慰問とか、義捐金の醸出とかいふことだけではなくて、一家の

經濟乃至自分一人の衣食等に至るまで、國家の生活乃至文化との關係を考慮しなくてはならないやうになつて來たのは、周知の事實である。否、今日に於ては、新聞の記事を正しく理解するだに、公民的知識が必要である。事實、事變に於ける戦死者の内縁の妻が、妊娠してゐるにも拘らず、結婚届が戦死にたつた二日だけ後れたために扶助料受容の資格を喪失したが如きは、其の顯著な例證ではないか。而も斯くの如き境遇に遭つてゐる婦人の數が、恐らく相當多數に上ることと信ずる。そしてこれは、平和克服後に於ても起り得る事象である。

但し、これらの必要に直ちに應ずるには、到底學校教育では間に合はない。但し、これは、學校に於ける公民教育が無用だといふのではない。目前大人に必要な公民的知識を補充することは學校教育の能くするところではないといふのみである。斯くして、來るべき公民教育は、當然社會教育の方面に擴大されなくてはならない。否、本來、公民教育は、其の本質上、社會的なものである。そしてこの點から見れば、公民的知識又は公民的教養が特に必要を痛感されつゝある今日こそは、公民教育の普及と徹底とを計るには眞に絶好の機會であるといはなくてはならない。而も、日本人の公民的教養が何時の間にかかなりに向上してゐるのが愉快に堪へない。例へば、兵役義務の履行を始め、生活の全野に亘つての生活統制や、在留交戦國民又は準交戦國民に對する紳士的態度の如

き、何れも其の證據である。勿論、これを理想的見地から見れば未だ不十分である。そしてその中で特に憂慮すべきは、官僚的傾向が強いことである。

本來、日本人は、一面に於て私的であり家族的であるにも拘らず、他面に於て官僚的である。随つて、命令や強制がなければ動かないといふ缺點もある。國民精神總動員が容易に徹底しないのも一つはこれがためである。そして公民的精神が自律的精神であるかぎり、これは、公民教育の普及と徹底と有害なものである。これと共に、日本人の缺點は、團體的生活に不慣れた點である。集會等がうまく行かないのは其の證據である。然るに、この缺點は、事變によつて或る程度まで匡救されたのは愉快なことである。併しながら、これも亦命令や強制に依る場合が多いから、安神せず、この機會に、これを習性化し、制度化して、容易く而も有效な團體的行動が出来るやうにしなくてはならない。そしてこれも亦、社會教育としての公民教育の任務である。

社會教育に於ける公民教育の必要はやがて學校教育に於ても亦同様である。そして近時の學校教育に於ける公民教育の主眼點は、第一に、高等教育及び女子教育が公民教育に一層注意し、第二に、公民教育の生活化に一段の努力を注ぎ、第三に、經濟的方面及び國際的方面を更に重視することである。

思ふに、高等教育は、其自身廣義の公民教育であるべきであるにも拘らず、公民科が特設されな
いために、在來はこれを輕視する傾向があつたのは遺憾である。勿論、高等教育を受けつつある學
生は、相當の公民的知識を所有してゐるが、それが、公民的精神又は公民的行爲とならないのは、
教育法が不完全なためである。そして茲に公民教育の生活化の必要がある。將來、女子教育に於て
一層公民教育が重要視されるべきことは、前述の理由から見ても明白なことである。

公民教育が實行を主とする教育であるかぎり、これを實生活と結合すべきことは自明事に屬する
にも拘らず、在來は遺憾ながら、單なる知育の範圍に止つてゐたのは否むべくもない。然るに、今
や、幸にして公民的知識の生活化の必要が一般に理解されるやうになつたと共に、其の機會も著し
く多くなつて來た。隨つて將來に於ては、益々この方面に力を注ぎ、公民的知識の持主を養成する
よりも、公民的精神の持主、否、眞に優れた公民を養成するやうにしなければならぬ。そしてそ
のためには、公民科擔當者は、自ら躬を以て率ゐる覺悟を要すると共に、あらゆる機會を活用して
被教育者の實行を指導するやうに努めなくてはならない。

最後に、在來の公民科は、何れかといへば、法制方面に傾いてゐた。そしてこれは將來と雖も重
要なことであるが、只公民生活の經濟的方面が質的にも量的にも益々其の重要性を加へつゝある點
に想到する時には、將來この方面を一層重視することの必要を力説せずにはゐられない。殊にこれ
は、公民教育を生活化するには其の經濟的方面を主とすべきものである點から見れば尙更である。
日本は、今や文字通に國際日本となりつゝある。隨つて將來の教育は、あらゆる方面に亘つて、
被教育者に明確な國際的自覺を持たしめるやうにすることが必要であるが、特にこれは國民教育に
於てさうである。日本の公民はやがて國際日本の公民だからである。而もこれは單なる理論ではな
くて否み難き事實である。將來は、生活の全野に亘り、支那との交渉を始め、世界の列強、殊に獨
伊・英・米諸國との關係が密接となり、極端にいへば日本國民の一舉手一投足が全世界に影響する
からである。而もこれは、必ずしも成人のみに限られることなく、學生・生徒・兒童にも關
係することである。殊に支那との交渉は、現下の一大問題であることはいふまでもないが、平和的
交渉に於て支那人の侮辱を受けるやうなことがあれば、皇軍將士の忠勇に對して洵に相濟まないこ
ととなるのである。そしてこれは、其の他の諸國との交渉に於ても同様である。

科學の振興と創造教育 終

昭和十六年六月一日 初版印刷
 昭和十六年六月五日 初版發行

科學の振興と創造教育

定價 貳圓八拾錢

著者 稻毛金七

發行者 藤原惣太郎
東京市京橋區入船町三丁目三番地

印刷者 芦田數夫
東京市京橋區入船町三丁目三番地



發行所

東京市京橋區入船町三番地
 振替東京一八五一三番

明治圖書株式會社

大 東 京	北 林 隆 館	東 海 堂	名 古 屋 川 瀨 書 店
大 阪	文 林 堂	文 盛 堂	久 留 米 菊 竹 金 文 書 店
大 都	大 阪 屋 號	西 澤 書 店	福 岡 大 坪 信 堂
株 式 會 社	柳	原 書 店	金 澤 宇 都 宮 書 店
大 都	柳	社	山 口 白 銀 日 進 堂

IT 4W5

終